

の漱石氏宛にかなり長い手紙をした、めたのは、看護日誌の無くなつた六月十六日であつた。

餘命いくばくかある夜短し

障子あけて病間あり薔薇を見る

の二句がその末に記されてゐる。

### 思ふ事あり蚊帳に泣く

はじめ佐藤三吉氏の診察を受けるに先つて、居士は漱石氏宛の手紙に「いよく外科的の刃物三昧に及ばなければならぬといつたら、男も僕だから直様入院して切るなら切つて見ろと尻をまくるつもりに候、尤も切り開いたら血も出ると存候、膿汁も出ると存候、痛いとも痛いとも存候、切つたために足の病氣が直つたらしめこのうさくだけれど少くもびつこになる位のはあると覺悟してゐる」と書いた。この手術によつて疾患を除去し得ると信ぜぬまでも、うまく行つたらといふ點に萬一の希望を懐いてゐたことは想像に難くない。然るに手術の結果は居士の苦

痛を軽減せず、五月の大半は病牀に呻吟して、筆硯を廢せざるを得なくなつた。前年「此病は僕麻質斯にあらず」といふ宣告を受けた時と、今年佐藤氏の手術を受ける時とは、その病勢は固より同日の談でないが、手術後の居士は「小生の病氣には快復といふことなく、やられる度に歩を進めるばかり故、此度も一層衰弱し復前日の小生にあらず」と歎じてゐる。この時の病を境として、回復に關する希望は擲つより外無くなつたのである。

六月二十八日虚子氏宛の手紙には「秋山米國へ行く由聞きし處、昨夜小生も亦渡行に決したることを夢に見たり、元氣未だ消磨せず、身體老いたり、一嘯」といふことが書いてある。秋山といふのは後に日本海々戰の參謀として知られた秋山眞之氏のこと、居士とは松山以來の親友であつた。健康な友人の活動を想ひやるにつけ、病魔に捉はれた自己の姿を憐まざるを得なかつたであらう。秋山氏渡米と聞いて、自分も亦渡行の夢を見る。「元氣未だ消磨せず、身體老いたり」と云ふ所以はこゝに在る。

送秋山眞之米國行

君を送りて思ふことあり蚊帳に泣く

の一句は、居士の心境を知る上から看過すべからざるものである。

七月に入つて居士は徐に元氣を取戻した。三日、十八日の兩度に俳句會を催してゐるのをはじめ、「日本」に「病牀苦吟」を掲げ、「ホトトギス」には「試問」を寄せて答を募ることになった。「病んで雨ふる、筆をとらんとすれば詩想既に消えて復尋ねべからず、生きて諸君に負くこと多し。いさゝか問題を掲げて一考を煩す、蓋し余が消閑の悪戯のみ」とあるけれども、實は前年の「俳句問答」と反對に、居士の方から問題を出して、後進の指導誘掖を圖らうとしたものである。この「試問」は「ホトトギス」が松山で出てゐる間、あとから次々に課され、前號の答と併せて誌上に掲げられた。「ホトトギス」にはこの外に尙「日本」に出た「俳人蕪村」が轉載されるやうになつた。

八月二日、山本木外氏から臺灣の筆と帳面とを贈られたのを機會に、居士は珍しく日記をつけはじめた。居士はあれだけ筆まめであつたに拘らず、二十五年秋から翌二十六年秋までの分の外、あまり傳はつてゐるものが無い。木外氏所贈の帳面は、上欄にその日の事を記し、下の罫のところに俳句を書きつけてゐるが、その第一日の條に病狀その他が詳記してあるから、こゝに擧げて置く。

頃日用フル所ノ藥餌

一 炭酸クレオソート二粒宛三度（食後）

一 散藥（興奮劑）一日四包

一 水藥三度

一 ブランデー十グラム位宛三度（食時）

一 朝飯 雞卵半熟一個、牛乳一合半位、多ク珈琲ヲ加ヘテ飲ム

一 午餐 隔日牛肉（淡路町中川ノロース二十錢）牛肉ナラヌ日ハ魚肉三椀位、野菜一皿

一 晚餐 魚肉、粥、野菜

一 牛乳三合、其内半ハ朝飲ミ殘リヲ二分シテ午後三時頃ト八九時頃トニ飲ム（湯煎）

一 牛肉スープ隔日（一斤十八錢位ナルヲ湯煎ニス）

此外間食スルコト多シ、醫師ハ隔日位ニ來リ背ノ繃帶ヲ更ヘ膿ヲ絞ル、近日體ヲ動かカスコト多キヲ以テ膿ハ自ラ押シ出サレ、故ラニ絞ルモ出ヌ事多シ、體温ハ朝六度位、夕七度四五分位ナルヲ例トス、左足引キツケテ立ツコト能ハズ、左ノ腰猶痛ム、仰向ニ臥シ又ハ左ヲ下ニシテ寐ヌルトキハ咳嗽ヲ發ス、毎日浣腸ス。

三十年大患後の状態に就て、これほど委しく記されたものは他に見當らない。食事の分量に關

する記載が少いけれども、已に健啖人を驚かすものがあつたのではないかと思はれる。

### 「曼珠沙華」と柿の歌

秋になつてからの居士は、「俳人蕪村」の稿を繼いで、遂に之を完成したのをはじめ、或は大野酒竹氏の「與謝蕪村」を評し、或は「若菜集の詩と畫」を論ずるなど、筆硯頗る多忙であつた。「日本人」にも八箇月ぶりで新體詩「微笑」を掲げた。日記を見ると頻に俳句分類にも従事してゐるやうだから、さういふ方面に於ては全く發病以前に復したものだと思はれるが、更に特筆すべきはこの間に於て小説に着手してゐることである。

九月十五日漱石氏宛の手紙に「近來たのまれて小説とやらをものし居候」とあり、日記を見ると九月十日から「小説ヲ草ス」といふことが頻に出て来る。これは誰に頼まれたのか明でない。小説は十月十七日に至り脱稿したらしく、同二十日から淨書にかゝつて居り、十月三十日に及んで

碧梧桐虚子來ル

晚餐、小説會ヲ開ク

といふ記事が見える。この小説が「曼珠沙華」であるが、小説會の爲に草したのか、誰かの依頼で書いたのを、小説會で讀んだものか、その邊はよくわからない。

「曼珠沙華」の大きな特色は第一に言文一致を用ゐた點に在る。この以前の居士は學生時代に興味半分で書いたもの、外、殆ど言文一致の文章を書いてゐない。この時思ひきつて言文一致を採用したに就ては、何か理由があつたのかも知れぬが、地の文章に言文一致を用ゐ、篇中の會話に松山言葉を用ゐたのは、居士としては最初の試であつた。從來居士の小説に用ゐられた舞臺は、「花枕」一篇を除き、何等かの意味で居士に交渉を持つた土地でないことも無かつたが、松山の地が取入れられたのは「曼珠沙華」を以て嚆矢とする。全體は空想趣味に屬するものだけれども、三並良氏の書かれたものによると、「曼珠沙華」の主人公になつてゐる人物も、その大邸宅も實際に在つたらしいし、こまかい寫生的な場面も隨所にある。「曼珠沙華」がこれまでの居士の小説と異なるのは、大體以上の諸點であるが、當時は遂にどこにも發表されずじまつた。「ホトトギス」にその一節を抜萃して載せたのは、居士の歿後大分たつてからのやうに記憶する。

十月十日、京都から歸つて來た桂湖村氏が、愚庵の庭になつた「つりがね」といふ柿と松茸とを居士の病牀に齎した。その日の日記には「愚庵の柿つりがねといへるをもらひて」と前書して柿の句が記されてゐるが、居士はこの柿に就て愚庵和尚に何も云つてやらなかつた。毎日小説執筆中であつた爲、取紛れて手紙を書く暇が無かつたのかも知れぬ。居士が愚庵和尚へ禮狀をしたためたのは十月二十八日の夜で、その翌朝湖村氏の來訪を受けた。湖村氏の許に愚庵和尚の寄せ來つた端書には歌が六首記されて居り、その最後の一首に「正岡はまさきくてあるか柿の實のあまきともいはずしぶきともいはず」とあつたのは、和尚が湖村氏に柿を託して以來、杳然として消息なきを訝つたのである。居士はこの歌を讀んで、直に追かけて次の手紙を和尚に贈つた。

昨夜手紙認めをばり候處今朝湖村氏來訪、御端書拜誦御歌いづれもおもしろく拜誦仕候、失禮ながら此頃の御和歌春頃にくらべて一きは目たちて覺え申候、おのれもうらやましくて何をかなと思ひ候へども言葉知らねばすべもなし、さればとて此まゝ黙止て過んも中々に心なきわざなめり、俳諧歌とでも狂歌とでもいふべきもの二つ三つ出放題にうなり出し候、御笑ひ草ともなりなんにはうれしかるべく

十月二十九日

あなかしこ

つねのり

愚庵 禪師 御もと  
みほとけにそなへし柿のあまりつらん我にぞたびし十あまり五つ  
柿の實のあまきもありぬかきのみ澁きもありぬしぶきぞうまき  
籠にもりて柿おくり來ぬふるさとの高尾の山は紅葉そめけん  
世の人はさかしらをすと酒のみぬあれは柿くひて猿にかも似る  
おろかちふ庵のあるじかあれにたびし柿のうまさのわすらえなくに  
あま。り。う。ま。さ。に。文。書。く。こ。と。ぞ。わ。す。れ。つ。る。心。あ。る。こ。と。な。思。ひ。吾。師  
發句よみの狂歌いかゞ見給ふらむ

此等の歌は全體の調子から云つて、寧ろ居士晩年の歌に接近してゐる觀がある。日記には第一首の「あまりつらん」を「のこれをを」に改め、第三首の「高尾の山は紅葉そめけん」を「高尾の紅葉色づきにけん」と改めてあるが、これは一度愚庵和尚に贈つた後、更に改削を加へたものであらう。「柿の實のあまきもありぬかきのみ澁きもありぬ」といふのが、「柿の實のあまきともいはずしぶきともいはず」に酬いたものであることは贅するまでもあるまい。この柿の歌は十月十日の日記にある「つりがねの蒂のところ澁かりき」「澁柿や高尾の紅葉猶早し」「柿熟す愚

庵に猿も弟子もなし」「御佛に供へあまりの柿十五」等の句を参照すべきものであるが、俳句を歌に移した——居士自身謙抑の辭を用ゐてゐる「發句よみの狂歌」といふ程度でなしに、渾然と出來上つてゐるのは注目し得る。二十九年から三十年へかけて、居士は一首の歌も「日本」に掲げて居らぬに拘らず、突としてこゝに一連の歌が現れるのは、單に愚庵和尚の歌から刺激を受けたばかりではない。やがて歌に向ふべきことを、豫告してゐるものゝやうに思はれる。

十二月二十四日、はじめて蕪村忌を子規庵に催した。舊派の俳人によつて營まれる芭蕉忌に對し、新に蕪村忌を修することをはじめたのは、その旗幟を明にしたもので、水落露石氏が遠く大阪から天王寺蕪を寄せ、庭前に寫眞撮影を試みるといふやうなことも、蕪村忌の行事として、その後も年々繰返されることになつた。この日會する者二十人、當日の記事は居士によつて翌年一月の「ホトトギス」に發表された。「ホトトギス」が南海に生れ、「俳人蕪村」が「日本」に連載される年に當つて、蕪村忌が新に行事となるのは極めて當然の成行であつた。

## 明治三十一年

### 第一の選集「新俳句」

明治三十一年（三十二歳）の初は、大體三十年の繼續と見るべき状態であつたが、この間に於ていさゝか單調を破つた事柄が二つある。一つは一月十五日に蕪村句集輪講が企てられたことで、季節の關係上冬の部から著手された。輪講は月一回の割で續行され、「輪講摘録」の題下に「ホトトギス」に連載されることになつた。已に「俳人蕪村」に於て總括的に蕪村の輪郭を描いた居士が、今度は蕪村の一句々に就て子細に吟味してかゝらうとしたのである。第一回は居士と碧、

虚兩氏のみであつたが、第二回には鳴雪翁も加つてゐる。居士がこの一月「日本」に掲げた「聞人閒話」は、劈頭に鳴雪翁が俗務多端のため俳壇を退く事を記し、「侃々も諤々も聞かず冬籠」の句を以てその一節を結んである。前年春俳事抛擲の結果、「ホトトギス」の選句をすら止めるに至つた翁が、三十一年に入つて再び俳壇に近づくやうになつた最初の動機は、蕪村句集論講に與るあたりに在るのではないかと思はれる。

もう一つは「新俳句」が刊行の運びになつたことである。居士一派の句を選んで一冊にしようといふことは、二十五年中に新海非風の手によつて計畫され、「案山子集」といふ名までついてゐたらしいが、遂に出版するに至らなかつた。その後碧梧桐氏あたりに編纂の企があつたのではないかと思はれることは、二十八年八月須磨から同氏に與へた手紙に「諸氏句集の事家集となすと類題となすと全く其目的を異にせり、各それ〴〵の面白みあればいづれをよしとも定め難く候、小生はいづれにてもよろしく候、家集とても四季に區別するは勿論四季中にも可成類題にせざれば殆んど興味無之候、いづれにしても一月や二月の日子をそれきりに費し判紙の數十帖と筆の十本位を用意しなければ出来ぬ事と信じ候」といふ注意があり、追かけて「選集の事に付きては何か御考違ひあらずやと存候、俳話と共に句集が出版せられたりとして此度の撰集に何等の影響も

なかるべく候」と申送つてもゐる。「俳話と共に句集が出版」といふのは、「瀨祭書屋俳話」の附録に收めた句を指すのではないかと思ふ。この時も亦形を成すに至らなかつたのである。

然るに三十年になつて、句集編纂の事は居士の身邊でなしに、上原三川、直野碧玲瓏その他の人々の間に起り、分類された句稿が居士の手許に届けられた。恰も居士の病苦の最も甚しい際であつたので、碧、虚兩氏に選擇せしめる考らしかつたが、思ふやうに進行せず、又居士のところへ逆戻りすることになつた。秋來元氣を回復した居士は、なるべく削る方針を以て之に臨み、一度選に入れた自分の句なども、意に滿たぬものは除去して他の句に換へたりした末、十月中には大體の業を卒へた。この稿本を印刷に廻したのが、現在傳はつてゐる「新俳句」なのである。

「新俳句」が民友社から刊行されたのは、この年の三月であつたが、居士がこの書の爲に序を草したのは一月中であつた。この書は鳴雪翁の題句に「百年にして天明二百年にして明治の初日影」とある通り、元祿、天明に對し一新時期を劃する明治俳壇初頭の産物として、永く後昆に傳ふべきものである。居士はこの編纂に就て最初から表面に立たず、その序中に就ても「三川、碧玲瓏諸子こゝに觀るあり」とのみ云ひ、自ら取捨選擇に任じたことには一言も觸れてゐないが、明治の俳句なるものが世に出たのは明治二十五年以後であるとし、次のやうな見解を述べてゐる。

明治二十五年以後は漸く元祿の高古を模し文化の敏贍を學ぶ。之をすら世人は以て奇を好み新を銜すと爲せり。其後蕪村を崇み天明を宗とするに及んで、文人學者は始めて俳句の存在を認めしが如く、可否の聲諸處に起る。可否の聲忽ち消えて俳句は其價値の幾分を世に知られたる時、元祿にもあらず、天明にもあらず、文化にもあらず、固より天保の俗調にもあざる明治の特色は次第に現れ來れるを見る。此特色たる天明に似て天明より精細に、蕪村に似て蕪村よりも變化多し。芭蕉、其角の夢にも見ざりし所、蒼虬、梅室輩の到底解する能はざる所に屬す。しかも此特色は或一部に起りて漸次に各地方に傳播せんとする者、此の種の句を「新俳句」に求むるも多く得難かるべし。「新俳句」は主として模倣時代の句を集めたるにはあらずやと思はる。然れども模倣は様に依りて胡蘆を描くの謂に非ず、模倣の中自ら其時代の發現しあるを疑はざるなり。但特色は日を逐ふて多きを加ふ。昨集むる所の「新俳句」は刊行に際する今、已に其幾何か幼稚なるを感ず。刊行し了へたる明日は果して如何にか感ぜらるべき。

「新俳句」は明治二十五年より三十年に亙る間の收獲である。「刊行に際する今、已に其幾何か幼稚なるを感ず」といふのは、自ら俳壇變遷の中に立つ居士の率直な感想でなければならぬ。居士

は更に語を轉じて、「明治の俳句といふ、或は明治年間の俳句を盡く含むとなす者もあらん。されど余の所謂明治の俳句は彼俗宗匠輩、月並者流の製作を含まず。蓋し彼等の製作の拙なるを以ての故に之を斥くるのみにあらず、彼等は不當の點を附して糊口の助となすの目的を以て之を作り、景物懸賞品を得るための器用として之を用ふる者、其目的已に文學以外に在り。文學以外に在る者固より俳句と稱すべくもあらざればなり。況んや其差香壤月髓のみならざるをや」と述べ、自己の立脚地を明にした。舊派俳人の共に齒するに足らざることは、從來居士によつて屢々論ぜられたところであるが、今「新俳句」の刊行に當り、改めて之を繰返す必要を感じたのであらう。

### 「歌よみに與ふる書」

二月十一日は「日本」の創刊記念日である。居士はこの日の紙上に「國都」一篇を掲げ、その翌日から、竹の里人の名を以て「歌よみに與ふる書」を載せはじめた。爾後三月四日の「十たび歌よみに與ふる書」に至るまで、次々に現れた十篇の歌論は、居士が歌壇に足を踏入れる最初の

烽火であつた。居士が歌を論ずるのはこれからはじめてではない。「文界八つあたり」以来、折に觸れてその所見を述べてゐるわけであるが、正面から攻撃の陣を進めたのはこの「歌よみに與ふる書」である。俳句方面に於ける事業は大體その緒に就き、「新俳句」の刊行をも見る運びになつたから、新なる天地を開拓すべく、歌の革新に著手したものかと思はれる。

「歌よみに與ふる書」十篇の内容は相當多岐に亙つてゐるが、劈頭先づ「仰の如く近來和歌は一向に振ひ不申候。正直に申し候へば萬葉以來實朝以來一向に振ひ不申候」といふ一大鐵槌を下して歌壇千年の眠を覺さうとした。萬葉を崇拜し實朝を尊重した眞淵の説でさへ、居士の眼から見ればその眞價を顯揚したものではない。居士はこの邊から論を進め、次いで「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだぬ集に有之候」と喝破した。これは正に第二の鐵槌である。居士は「實は斯く申す生も數年前迄は古今集崇拜の一人にて候ひしかば今日世人が古今集を崇拜する氣味合は能く存申候」と云つてゐる。一度月並の世界を窺つて後之を脱却し、古今集崇拜の過程を経て後之を抛擲する。居士の強味は寧ろこの點に在る。漫罵自らよろこぶの境にとゞまらず、一々その弊所に觸れるのは偶然でない。

居士は總論的に眼目を定めた上、各論として實例の吟味にかゝつた。世間に傳誦される歌が如

何に下らぬものであるかといふことに就き、古今集その他の歌數首を擧げて、その下らぬ所以を細説してゐる。この筆法は嘗て「芭蕉雜談」に於て試みたのと同じ行き方であるが、前人の批判を顧慮せず、直に自己の眼孔を以て臨むところに居士の歌論の大きな特色がある。在來の學者が拘泥するやうな點も、構はず飛越えて進み得るのはその爲である。自分は古今東西に通ずる文學の標準——自ら斯く信じてゐる標準——によつて文學を論評する、昔は風帆船が早かつた時代があるにしろ、蒸汽船を知つてゐる眼から見れば、風帆船は遅いといふのが至當である、假に貫之が貫之時代の歌の上手であるにしたところで、前後の歌よみを比較して、貫之より上手な者が澤山あると思つたら、貫之を下手と評することも亦至當でなければならぬ。——居士はこの態度を以て古來の歌を評し去つたのであつた。

宗匠的俳句が直に俗氣を連想せしむる如く、和歌といふと直に陳腐を連想する、和歌の腐敗は趣向の變化せぬことが原因であり、趣向の變化せぬのは用語の少いのが原因である、だから趣向の變化を望む以上は、是非とも用語の區域を廣くしなければならぬ、といふ觀點から、居士は次のやうに論じた。

外國語も用ゐよ、外國に行はるゝ文學思想も取れよと申す事に就きて、日本文學を破壊する



者と思惟する人も有之げに候へども、それは既に根本に於て誤り居候。たとひ漢語の詩を作るとも、洋語の詩を作るとも、將たサンスクリットの詩を作るとも、日本人が作りたる上は日本の文學に相違無之候。唐制に模して位階も定め服色も定め置き、唐ぶりたる冠衣を著け候とも、日本人が組織したる政府は日本政府と可申候。英國の軍艦を買ひ獨國の大砲を買ひ、それで戦に勝ちたりとも、運用したる人にして日本人ならば日本の勝と可申候。

かういふ言葉を讀むと、直に汪洋たる居士の胸懷に觸れるやうな氣がする。居士の頭の中には本末の別が明に立つてゐる。「如何なる詞にても美の意を運ぶに足るべき者は皆歌の詞と可申、之を外にして歌の詞といふ者は無之候」といふ一語によつてもわかるやうに、古來の歌よみのめぐらした柵の如きは、頓著無しに破壊して通るけれども、「如何に區域を廣くするとも非文學的思想は容れ不申、非文學的思想とは理窟の事に有之候」といふ一點に至ると、斷々乎として毫も假借せぬ。居士の眼から見れば、世間の歌よみは些々たる小問題にのみ拘泥して、根本の大問題を閑却するものとしか思はれなかつた。當時は居士の所論を讀んでもそこがわからず、「何れの世に何れの人が理窟を詠みては歌にあらずと定め候哉」といふ暢氣な質問を提出して、「理窟が文學に非ずとは古今の人東西の人盡く一致したる定義にて、若し理窟をも文學なりと申す人あらば、それ

は大方日本の歌よみならんと存候」と居士から一蹴される人もあつたのである。

有名な歌の下らぬ所以を指摘した居士は、いゝ歌の例として實朝の歌數首を擧げ、次いで「新古今」に及んだ。居士は「俳諧大要」に於て和歌と俳句との關係を論じた時、「新古今集には間々佳篇あり」と云ひ、「なこの海霞のまよりながむれば入目を洗ふ沖つ白浪」とか、「閨の上にかたえさしおほひ外面なる葉廣柏に霞ふるなり」とかいふ歌は、俳句にもなり得べき意匠であるとした。居士が「新古今」から引いた歌は、大體客觀的なものが多いやうであるが、最後に傳教大師の「阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわが立つ袖に冥加あらせたまへ」の一首を擧げ、「いとめでたき歌にて候。長句の用ゐ方など古今未曾有にて、これを詠みたる人もさすがなれど、此歌を勅撰集に加へたる勇氣も稱するに足るべくと存候」と賞揚した。居士を以て客觀歌にのみ偏すると云ふ人に對しては、實朝の歌を擧げて必ずしも然らざる旨を説き、強い調子の歌に偏すると云ふ人に對しては「新古今」の數首を擧げて、又然らざる所以を辨じたものゝやうに見える。「阿耨多羅」の一首を擧げたのは、「新古今」の中に於ても客觀歌に偏するものでないことを明にすると同時に、字餘りの趣味を説かうとしたらしい。字餘りの趣味などといふことは、恐らく在來の歌人のあまり關心を持たぬところであつたらう。

居士は「歌よみに與ふる書」十篇を通じて、唯一の標準を文學的價値に置き、第二義的な附屬的條件は一切之を排除した。當時の既成歌人の如きは最初から居士の問題とするところではなかつた。「歌よまんとする少年あらば老人杯にかまはず勝手に歌を詠むが善かるべしと御傳言可被下候。明治の漢詩壇が振ひたるは老人そつちのけにして青年の詩人が出たる故に候。俳句の觀を改めたるも月並連に構はず思ふ通りを述べたる結果に外ならず候」といふ數語は居士の目的の那邊に存するかを窺ふべきもので、居士は歌よみならぬ歌よみが出て、和歌の革新に協力すべきことを期待してゐたのであつた。

### 「百 中 十 首」

「歌よみに與ふる書」は忽に多くの反響を生じた。舊派の俳人よりも歌よみの側に文字のある人が比較的多かつた爲、未知の人からの駁論も續々居士の机邊に到つたが、反響は固よりこれにとどまらなかつた。三月二十八日漱石氏宛の手紙に「歌につきては内外共に敵にて候、外の敵は面

白く候へども内の敵には閉口致候、内の敵とは新聞社の先輩其他交際ある先輩の小言に有之候、まさかにそんな人に向て理窟をのぶる譯にも行かず、さりとて今更出しかけた議論をひつこませる譯にも行かず困却致候、併シ歌につきてはたび／＼失敗の經驗有之候故、今度ははじめより許可を出願して而後に出しはじめしもの、此上は死ぬる迄ひつこみ不申候」とある通り、歌論に對する反對者は存外居士の近くに在つたのである。

俳句の問題に關しては全然居士に一任し、何の異見も挿まなかつた羯南翁も一朝歌の話になると、自ら加納諸平の歌を好み、一個の意見を懐いてゐるだけに、居士の歌論を頭から肯定するわけに行かなかつた。萬葉調の歌をよくし、居士の所論に同感するところ多かるべき筈の愚庵和尚も、論調の急激なのに驚いたものか、書を寄せて居士の注意を促した。當時の居士の手紙には羯南翁宛のものが二通、愚庵和尚宛のものが二通傳はつてゐるが、いづれも歌に關する意見の異同を辨じたものである。かういふ先輩の意見に就ては居士も豫め慮る所があつたから、掲載に先つて羯南翁の諒解を得たのであらうが、その羯南翁が驚く程、居士の歌論は激烈だつたのである。

愚庵和尚が羯南翁に與へた手紙を見ると、「餘り言過ぎては所謂口業を作る者にして其徳を損する事多からんを恐るゝ也」と云ひ、居士が從來博し得た盛名を累することになりはせぬかといふ

ことを憂慮してゐる。居士の得能秋虎氏宛書簡に「自分左程危険には思はねども周囲の人（俳人は除け）が甚だあやぶみ居候處如何にも面白く候、小生如何に愚なりとも將た病體なりとも今の歌よみどもには負け申間敷候」とあるのが、當時の空氣をよく傳へてゐるやうに思ふ。居士は周囲の人の懸念する如く憂慮せず、周囲の人は居士の自ら信ずる如く、その歌に於ける力量を信ぜぬといふのが當時の實際であつたらしい。

「歌よみに與ふる書」の内容以上に先輩を懸念せしめたものは、歌に於ける居士の作品であつた。居士が和歌の革新を思立つてから、はじめて「日本」に歌を掲げたのは二月二十七日、「六たび歌よみに與ふる書」と「七たび歌よみに與ふる書」との中間である。この歌を發表するに先ち、居士は歌の草稿を知友先輩の間に廻して、百首ばかりの中から十首を選まんことを依頼し、各人の選に成るものをそのまゝ、「百中十首」と名づけて發表した。選者十一人のうち、竹柏園（佐佐木信綱）徒然坊（阪井久良伎）某（陸羯南）戲道（末永鐵巖）の四氏を除く外は、皆俳人ばかりである。従つてその選ぶところも何等繩墨に拘らず、時に突飛に見えるものまでも構はず取入れてゐる。

「百中十首」を通覽して著しく眼につくのは、字餘りの多いこと、漢語の多く用ゐられてゐる

ことであらう。字餘りに就ては「九たび歌よみに與ふる書」にも説があるが、四、五の句、殊に五の句の字餘りが多いのは、居士が後に歌を評するに當つて屢々用ゐた「頭重脚輕」の弊を防ぐ爲と思はれる。漢語を取入れたのは在來の歌のなだらかな調子に對し、寧ろ佶屈な強い調子を用ゐようとしたもので、これには俳句に於ける蕪村の影響——漢語の多かつた當時の俳壇の傾向を考慮しなければならぬ。併し「夜を守る砦の篝影冴えて荒野の月に胡人胡笛を吹く」「城中の千戸の杏花咲きて關帝廟下人市をなす」「官人の驢馬に鞭うつ影も無し金州城外柳青々」といふやうなものになると、いさゝか漢語調に偏し過ぎた嫌があり、漢詩畠の桂湖村氏なども「山里に蠶飼ふなる五畝の宅麥はつくらす桑を多く植う」とか、「こゝろみに君がみ歌を吟すれば堪へずや鬼の泣く聲聞ゆ」とかいふ位ならいゝが、あまり澤山用ゐては困るといふ注意を與へたほどであつた。漢語の問題は字餘り以上に先輩の首を傾けしめたに相違無い。

用語を離れた内容の問題に就ても、「百中十首」の中には、居士が嘗て「文學漫言」の中で述べた「三十一字の俳句」に近いものが少からずある。「後夜の鐘三笠の山に月出でて南大門前雄鹿群れて行く」「ぬのしゝはつひに隠れし裾山の尾花が上に野分荒れに荒る」「餅あげて狸を祭る古榎紙の幟に春雨ぞふる」「朝な〜掃きあつめたる落椿紅腐る古庭の隅に」「小鮒取るわらはべ去りて

門川の河骨の花に目高群れつゝ」といふやうな歌は、このまゝ直に俳句に移し得るかどうかは第二の問題として、俳諧的要素に富んでゐることは事實である。居士の歌が用語の區域を廣くし、趣向の變化を求めた點を認められないで、俳人の餘伎といふ風に見られ勝だつたのは、居士が俳壇に盛名を得てゐたからに外ならぬ。

けれども「百中十首」が歌壇の寂寞を破り、清新な空氣を注入した點は何人も認めざるを得なかつた。

霜防ぐ菜畑の葉竹はや立てぬ筑波嶺おろし雁を吹く頃  
人も來ず春行く庭の水の上にこぼれてたまる山吹の花  
榛の木に鴉芽を囓む頃なれや雲山を出でて人畑を打つ  
病みて臥す窓の橘花咲きて散りて實になりて猶病みて臥す  
寂靜まる里のともし火皆消えて天の川白し竹藪の上に  
風吹けば蘆の花散る難波潟夕汐満ちて鶴低く飛ぶ  
武藏野の冬枯芒婆々に化けず鼻に化けて人に賣られたり

金州戦後

山陰に家はあれども人住まぬ孤村の柳緑しにけり

かういふ歌は居士在來の作品に比して新生面を開いてゐるのみならず、自然の趣に富んでゐる點に於て、當時の新派の歌とも色彩を異にする。「百中十首」の出現は、明治歌壇に取つても忘るべからざる事柄であつた。

### ホーマーもプラトーンも如何ともする能はず

三十年後半から三十一年へかけて、居士の健康は比較的無事であつた。「歌よみに與ふる書」を草し、「百中十首」の歌を作るあたりは、毎夜二時、三時頃まで起きて居り、時には徹夜もするといふやうな勢で、遂に血痰を見るに至つたが、その後格別の事も無しに済んだのは、全く健康状態がよかつた爲であらう。三月十七日には好晴に乗じて門を出で、人力車の郊外逍遙を試みた。足は相變らず立たぬから、車に乗るにも人の背を借らなければならず、車の上でも脊骨が痛くて困つたが、一年ぶりの外出だけに居士は非常に愉快だつたらしい。太刀佩きていくさに行くと梅

の花見てし年より病みし我かも「車して戸田の川邊をたどりきと故郷人にことつげやらん」と詠んだのはこの時である。居士が梅の花を見たのも、二十八年從軍の春以來といふことになるのであつた。

「歌よみに與ふる書」に關する非難、質問に對しては、三月六日に先づ「あきまろに答ふ」の一文を掲げ、次いで「人々に答ふ」の題下に一括して「日本」に連載した。「人々に答ふ」の冒頭に「歌の事に就きては諸君より種々御注意御忠告を辱うし御厚意奉謝候。猶又或る諸君よりは御嘲笑御罵詈を辱うし誠に冥加至極に奉存候。早速御禮旁々御挨拶可申上之處、病氣にかゝり頃日來机離れて横臥致居候ひしたため延引致候。幾百年の間常に腐敗したる和歌の上にも特に腐敗の甚だしき時代あるが如く、吾等の如き常病人も特に病氣に罹る事有之、閉口の外無之候」とある「病氣」は、血痰を見ることを指すものと思はれる。

「人々に答ふ」は飛びくではあつたが、三月から五月に互り、回を重ねること十三に及んだ。居士の答は快刀亂麻を斷つが如く、一として懸疑するところが無い。十回の「歌よみに與ふる書」の説いて盡さざるところを補つて餘あるのみならず、その他の問題に就ても、問はるゝに従つて直に解決を與へてゐる。質疑と云ふよりは論難に近いものが多いだけに、「俳句問答」などに比べ

ると、居士の答も鋭く且強い。

或人は「古來、歌といひ來りたるは子の作る所の如き者に非ず。されば子の作る所は一種特別の者なれば、歌といはずに何とか外の名を用ひては如何」と云つた。居士は之に答へて「面白き事を承る者かな。吾等は歌といふ語を拜借しても宜しからんと考にて歌と言ひ來りたるも、それが悪しとならば如何にも名づけ給はるべし。俳諧歌となり狂歌となりと味噌となりと糞となりと思ふやうに名づけられて苦しからず。吾等は名稱などに拘らざるなり。されど言葉の遊びを主とする古今集の誹諧歌と、趣味を重んずる吾等の作とは根柢に於て同じからざるを忘れたまふな。地ぐちシヤレを喜ぶ所謂狂歌と、地ぐちシヤレを擯斥する吾等の作と立脚地を異にする事を忘れたまふな。それを承知の上でなら何とでも名づけ給はるべし」と一矢酬いてゐる。

或人は「詩聖ホーマーの如きも單に美を愛せりとするか、美にして善なるものを愛せしにあらざるか」と搦手から肉薄した。これは居士が前に普通の場合教訓的の者は文學の範圍外とし、「一般にいへば歌は倫理的善惡の外に立つ處に妙味はあるなり。俗世間の渦巻く塵を雲の上で見て居る處に妙味はあるなり」云々と述べたことに對する反駁であらう。古來の傳統を金科玉條とする一面、泰西の文豪の説を根據とする説が出て來るのは、當時の世の中をよく現してゐるやうに思

ふ。居士はこれに對してかう答へた。

美にして善なるも善し。美にして善惡の外に立ちたるも善し。吾等はホーマーの詩を知らず、果してホーマーの詩は終始「善」を離れざるか。ホーマーの詩「善」を離れずとするも、吾等はホーマーに倣はんと思はず、吾等は善惡の外に美を認むればなり。吾等はプラトールが眞善美とやらを説いたからとて、それに従はざるべからずとは思はず。吾等の美と信する所はホーマーもプラトールも如何ともする能はざるなり。

この答は實に胸のすくやうな思がある。居士は「古今集」以下の悪歌の盲拜を嘲ると同じ意味で、泰西の學說に盲從するのを陋とした。それも國粹論者のやうな偏見に立つわけではない。自己の信する標準に照して、可なるものを可とし、非なるものを非とするのみである。「吾等の美と信する所はホーマーもプラトールも如何ともする能はざるなり」といふのは、居士のあらゆる場合に通ずる態度であつた。確立した自己を有する者でなければ、所詮この言を吐くことは不可能である。

「人々に答ふ」の内容は「日本」を通じて未知の人に答へるばかりでなく、直接居士に書を寄せた知己先輩に對する答も自ら包含されてゐる。「ものゝふの八十氏川」の歌に關する答の中には、

愚庵和尚に對するものも交つてゐるらしいが、鳴雪翁の「和歌が古來より人を感動せしめたる例少しとの説は誤れり」といふ反駁に對しても亦「日本」紙上で答へた。感動せしめたといふ例はいくらもあるけれども、その歌があまりつまらぬものだから考慮に入れなかつたのである。かういふ感激は感動する相手とその場合に因ることが多い、猛きものゝふの心を和げなどと云ふが、猛きものゝふなどは大抵趣味の卑しい者だから、彼等を感動せしめた歌も趣味卑く取るに足らぬものである、贈答送別などの場合に感ずるといふこともあるが、これもその場合に適切なるが爲に感ずるので、必ずしも價値の標準にならぬ、といふのが居士の論旨である。

かういふ特別な背景を離れて、何時でも誰でも感動する歌を見ても、多くは之を淺薄と認めざるを得ない、といふ見地から居士は「しきしまのやまと心を人間は朝日に匂ふ山櫻花」の歌を例に引き、その缺點を指摘した末、「余も曾て此歌に感じたる時代あり。されど數年間文學專攻の結果は余の愚鈍をして半歩一步の進歩を爲さしめたりと信ず」と云つてゐる。居士の言は常に率直である。宣長の山櫻の歌をつまらぬといふだけの見識が立つた者は、恐らくは自分も曾てこの歌に感じたといふ事實を告白せぬであらう。妄に生知安行の人を裝はぬところに居士の面目は窺はれる。

居士は更に語を次いで云ふ、「少しく文字ある者は都々逸を以て俚野唾すべしとなす。しかも賤妓治郎が手を拍つて一唱三歎する者は此の都々逸なり。苟も詩を作る者は雲井龍雄、西郷隆盛等の詩を以て淺薄露骨以て詩と稱するに足らずとなす。しかも書生が放吟し劍舞し快と呼び壯と呼び彼等をして怒髪天を衝かしむる者は西郷雲井等の詩ならざるべからず。稍々美文を解する者は、山居士の抜刀隊の歌を以て粗雜鹵莽取るに足らずとなす。しかも兵士が挺身肉薄敵城を乗り取らんとする時、彼等の勇氣を鼓舞する者は抜刀隊一曲の歌ならざるべからず。大喝采的の作は概ね此の如し」——多くの人が感心するといふ一事は、歌の爲に重きをなすに足るものではない。居士は「多數素人へのあてこみは少數玄人の最も厭忌する方法を取らざるべからず」と云ひ、「余は寧ろ大喝采的の作といふ一事を以て其卑俗を證せんとす」と斷言した。大喝采的の要素を解析して遺憾無きものである。

以上は「人々に答ふ」の一斑である。「歌よみに與ふる書」にしろ、「人々に答ふ」にしろ、局部的言説を引用したところで意を盡すべくもないが、居士の議論の如何なるものであるかは、多少これで髣髴し得ることゝ信ずる。

### 俳人のみの歌會

三月二十五日、はじめて子規庵に歌會を開いた。會する者居士をはじめ、碧梧桐、虚子、露月、墨水、秋竹、遠人(把栗)の諸氏で、秋竹氏の外は悉く「百中十首」の選に當つた人ばかりである。十題を課して作歌を試みたが、この記事はどこにも發表されなかつた。漱石氏宛の手紙に「先日始めて歌の會を催し候、會するものは矢張俳句の連中のみ」とあるのはこの事である。居士の企てた最初の歌會であり、何か期するところがあつたのかも知れぬが、一回催したきりであとが續かなかつた。

「日本」紙上には引續き歌が掲げられた。此等の歌の中には「百中十首」當時に已に出来てゐたものも無いではなかつたが、多くは季節の進むに従つて新に詠んで行つたものゝやうである。一回分の歌が八首に限られてゐるのは、多分「日本」の原稿紙が十八行であつた關係であらう。俳句に於て一題十句を試みたと同じく、同題の下に變化を求め、和歌の内容を豊富ならしめようと

した迹が認められる。

故郷の梅の青葉の下陰に衣浣ふ妹の面影に立つ  
 緑立つ庭の小松の末低み上野の杉に鶯の居る見ゆ  
 夕顔の苗賣りに來し雨上り植ゑんとぞ思ふ夕顔の苗  
 神鳴のわづかに鳴れば唐茄子の臍とられじと葉隠れて居り  
 うたゝ寐のうたゝ苦しき夢さめて汗ふき居れば薔薇の花散る

「百中十首」時代よりも更に自然に近づき、題材を自己の身邊に求めようとする傾向が見える。「神鳴」の歌は「狂體」とあるが、かういふ滑稽味は在來の歌人の多く關知せざるところであつた。俳諧より脱化し來つたものであらう。

歌論の方も「人々に答ふ」で一段落を告げたらしく、その後暫くの間「日本」に何も出てゐない。厄月の五月も無事通過することが出來た。五月二十九日漱石氏宛の手紙に「此頃は庭前に椅子をうつして室外の空氣に吹かるゝを樂み申候」とある通り、天氣がよければ庭に出ることを樂にしてゐたやうである。「椅子を置くや薔薇に膝の獨るゝ處」「若葉陰袖に毛蟲をはらひけり」なども詠んでゐる。一年前の五月とは大變な相違である。

歌に没頭してゐるやうに見えた時代と雖も、居士は俳句を抛擲してゐるわけではなかつた。「ホトトギス」には「試問」「論講摘録」「俳句分類」等を續載する外、「ト笠十句集を評す」とか、「拜啓」などといふ文章を掲げたこともある。「拜啓」は後の「ホトトギス」によく書いた「消息」の類で、消息文の體を以て近況を傳へたものである。居士が私信以外に病狀を細敍したのは、この一篇がはじめであらう。足の立たぬ病牀で仕事を續ける苦痛と不便は少くないが、「物に負けてしまふ事は大嫌ひにて、此苦しさに苦しめられながら全く負けてはしまはず、苦しさの中に出て來るだけの仕事を致し居候」とも云つてゐる。「其仕事と申すは固より俳句のみにあらざれども、縦し俳句ばかりとするも小生の一生（縦令長生するとも）に餘る程の仕事を控へ居候。俳句を作り俳論を草する外に俳句分類に従事致居候。常の人ならば今日の仕事もすんだからこれから人の内へ話しに行かうとか、寄席に行かうとか、散歩に行かうとか、酒飲みに行かうとかいふ場合に小生は俳句分類に取り掛り候。今日は日曜だから一日遊んでしまふといふ處ならば、今日は一日分類をやつて遊べといふやうな事に相成候」ともある。歌及歌論を連載する間も、「日本」の俳句は常のやうに出てゐた。一月に「明治三十年の俳句」を掲げた以來、俳論が「日本」に出なくなつただけのことである。



「ホトトギス」の「試問」は四月に至つて「或問」となつた。人の問に答へたもので、前の「俳句問答」後の「随問随答」と同じ形式であるが、問の短く答の長いのを特色とする。「或問」は二回で止んだけれども、「ホトトギス」誌上に最も多く筆を執る者は、他の健康者でなしに病牀の居士であつた。

「日本」ホトトギス」以外にも、居士はいくつか書いたものを發表してゐる。雑誌「韻文學」に出た「曝背閒話」(三月)「中學新誌」に出た「すゞし」(七月)「反省雜誌」に出た「十年前の夏」(同)等がそれである。歌に關して「日本」に活動を續ける外、俳句方面の仕事を大體「ホトトギス」に集中し、猶且餘力を他の雜誌に及ぼす居士の精力は驚歎の外無いが、縦横にその筆を揮ひ得ただけ、この年の居士は健康状態がよかつたものと見なければならぬ。

### 「足立たば」「われは」

七月の何日であるかわからぬが、居士は夕方から車に乗つて出遊を試みた。「日頃のつれくを

慰めんとある夕車に載せられて兩國向嶋などうちめぐるに見る者皆珍らかなる心地しければ」といふ前書で、八首の歌が七月三十日の「日本」に出てゐる。越えて八月八日「夕涼み」といふ題で「日本」に掲げた文章は、この時の事を記したものである。歌と文章と相俟つて見ると、その時の様子の思ひやらのものが多い。居士は兩國を渡つて川沿に吾妻橋の方へ向ひながら、「上げ汐溢れんとして夕風波だつ中を人のぬき手きつて泳ぐを見るに、物おそろしき心地に先づ肝潰るるは我ながら氣の衰へたるよ」と云つてゐる。「風起る隅田の川の上げ汐に夕波かづき泳ぐ子等はも」といふ歌はこの事を詠んだので、足立たぬ身を車で運ばれる居士にして、はじめて「物おそろしき心地に先づ肝潰る」といふ心持が起るのであらう。

向嶋は明治二十一年に居士が一夏を過し、「七草集」を草した處である。月香樓は依然としてそこに在り、昔の人もそこに住んでゐる。居士はこの歸途、今戸の灯の近くつらなり、大きな三日月の入らんとして駒形堂にかゝつてゐるのを見、十年前の自己を顧みて懷舊の情に堪へなかつた。

我昔住みにし跡を尋ねれば櫻茂りて人老いにけり

月細き隅田の川の夕間暮待乳を見ればむかし偲ばゆ

「十年前の夏の二日月此夕」といふのはこの時の懷舊の句であるが、やはり歌の方がよく情懷を

現してゐるやうである。

八月中は歌を作ること最も多く、「日本」に発表した回数も十二回に及んでゐる。『戲道種竹不折諸氏黒田侯に俱して富士へ登ると聞えければ』とか、「わが庭」とか、「日暮里諏訪神社の茶店に遊びて」とか、「灼くが如き暑き日に雪の圖をかけて」とかいふ風に、一の場合なり光景なりを詠んだものが多くなつたこと、「讀杜詩」の題下に「石壕吏」「秋興八首」「新婚別」等の詩を歌に移したことも、從來といさゝか趣を異にしてゐるが、それよりも更に注意すべきものは、獵官熱を嘲つた「蒼蠅の歌」とか、「足立たば」とか、「われは」とかいふ種類のものである。これまで「日本」に掲げられた居士の歌は、俳句に於ける一題十句と同じく、或題目によつて起る連想を片端から歌にしたので、察ろその變化をよるこぶ傾向が多かつたから、一首々々の間に連絡が無いのみならず、全體として見ても別に纏つたものがあるわけではない。然るに「蒼蠅の歌」以下のものに至つては、連想の赴くまゝに歌をつらねることは同じであつても、そこに小環を貫く大環の如きものがあり、全體が或一つのものになつてゐる。前後して「日本」に出た「雲の峰」とか、「團扇」とかいふ歌に比べて見れば、その點は明になることと思ふ。

足立たば箱根の七湯七夜寐て水海の月に舟うけましを

足立たば不盡の高嶺のいたゞきをいかづちなして踏み鳴らさましを  
 足立たば二荒のおくの水海にひとり隠れて月を見ましを  
 足立たば北インヂヤのヒマラヤのエヴェレストなる雪くはましを  
 足立たば蝦夷の栗原くぬ木原アイノが友と熊殺さましを  
 足立たば新高山の山もとにいほり結びてバナ、植ゑましを  
 足立たば大和山城うちめぐり須磨の浦わに晝寐せましを  
 足立たば黄河の水をかち渉り華山の蓮の花剪らましを  
 阪井久良伎氏が箱根から數葉の寫眞を送つて來た。それに對して「三寸の筒を開けばたまくしげ箱根の山はあらはれにけり」と詠んだことからこの連想ははじまるのであるが、足の立つ望を失つた居士が「足立たば」といふ空想をつらねるところに、普通の空想と異つた響がある。「二荒のおくの水海」居士が「中禪寺の湖は一たび余が目に觸れしより後、再び忘るべからざるの地なり」と云つたところであり、「晝寐せましを」といふ須磨は嘗て療養に日を送つた馴染の地である。新領土の臺灣を思ひやるにつけても、「バナ、食はましを」といふ希望を述べてゐるのは居士の居士たる所以であらう。

「われは」の方は更に一層強く居士の境涯が現れてゐる。

世の人は四國猿とぞ笑ふなる四國の猿の子猿ぞわれは  
 ひんがしの京の丑寅杉茂る上野の陰に晝寐すわれは  
 いにしへの故里人のゑがきにし墨繪の竹に向ひ坐すわれは  
 人皆の箱根伊香保と遊ぶ目を庵に籠りて蠅殺すわれは  
 富士を蹈みて歸りし人の物語聞きつゝ細き足さするわれは  
 吉原の太鼓聞えて更くる夜にひとり俳句を分類すわれは  
 昔せし童遊びをなつかしみこより花火に餘念なしわれは  
 菓物の核を小庭に蒔き置きて花咲き實る年を待つわれは

「富士を蹈みて歸りし人」といふのは、黒田侯に俱して登山した末永鐵巖、本田種竹、中村不折の諸氏のうちであらう。或は藏澤の竹の畫に向ひ、或は病牀に蠅を打ち、或は夜更くるまで俳句分類に従事する。居士の姿もいろ／＼であるが、餘念なく線香花火に興じたり、菓物の核を庭に蒔いて遠い將來を待つたりしてゐるのは、特に子供のやうな天真に觸れる思がある。

第一句乃至第五句に同じ言葉を用ゐて何首も歌をつらねるのは、古人にも例があり、必ずしも

居士の創意を以て目すべきでないが、その内容に至つては餘人の容易に窺ふを許さぬものがある。居士の作品としてのみならず、當時の歌として一新生面を開いたものと見るべきであらう。

### 「ホトトギス」東遷

三十一年後半の出来事として、特筆すべきものは、「ホトトギス」の東遷であらう。「ホトトギス」は創刊以來一年たつたところで、已に一度停頓の状を示したことがあつた。極堂氏が多忙の爲「ホトトギス」の仕事に鞅掌することが出来ず、編輯を他人に任さうかと云つて來た時である。居士はこれに對して種々の意見を具陳し、「何にもせよ小生は只貴兄を頼むより外に術無く貴兄若し出来ぬとあれば勿論雜誌は出来ぬと存候」と云ひ、又「一時編輯を他人に任すはよろしけれど到底それは一時のとしして再び貴兄の頭上に落ち來るは知れたと存候」とも云つてゐる。同じ手紙の中に「然れども東京にて出すには可なり骨が折れて結果少くと存候、畢竟松山の雜誌なればこそ小生等も思ふ存分の事出来申候」といふことがあるから、東遷の事は多少問題に上つた

のかも知れぬ。

居士が「ホトトギス」の第四卷第一號に書いた文章によると、それから半年ほどたつて、何分にも忙しくて困るが、雑誌は東京で引受けてやらぬか、といふことを極堂氏から云つて來た、東京でやるなどといふことは思ひもよらぬので斷つたが、當時歸郷中であつた虚子氏が引受けてやることを思ひ立ち、居士に相談して來た、といふ経緯が述べてある。「ホトトギス」東遷の事はこの時決定したのである。

二十六年の「俳諧」二十七年の「小日本」居士の關係した新聞雑誌は皆早く挫折した。居士の念頭には常にこの事があつたから、三度目の「ホトトギス」が出なくなるといふことに就ては、居士は人知れぬ苦痛を感じざるを得なかつた。虚子氏に答へた長文の手紙にはかういふ一節がある。

今一つ氣になつて居るのは「俳諧」といひ「小日本」といひ小生の關係した物は盡く失敗に終つた、尤も小生が自ら發起した者は無い、小生自ら發起した事があるならそれは小生の生命と終始すべきものであるけれ小生は中々發起などせぬ、併し幾ら他人に誘はれたものでも三度となると少しは小生の男にもかゝる、「ホトトギス」は三度目ぢやけれ代りの雑誌が出來りや

格別、さうでなければどうかして倒さぬやうにと心がけて居る、それであるから今度の計畫に就いても二の足を踏む次第ぢや、併し男ぢや、只貴兄の決心次第ぢや

居士は「ホトトギス」の存続に就て異常な執著を持つてゐる。併し自分でやつて行くといふ段になると、幾多躊躇逡巡すべき理由がある。虚子氏に念を押すのはそれが爲で、「つまり貴兄と小生と二人でやつて行かねばならぬ、若し小生病氣したら貴兄一人でやらねばならぬ、貴兄病氣したら小生一人でやらねばならぬ」その決心がついてゐるかどうか、といふのである。春以來比較的工合がいと云つても、居士の状態はさう平穩なわけではない。「數日前寒暖計が九十五度以上つた、暑いのはそれ程苦まぬ小生も餘り苦し過ぎると思ふて驗温器を取ると卅八度七分あつた、卅八度七分の熱を熱と知らないで天氣の熱いと間違へて居る位ぢやけれ平生いかに苦に馴れて居るかは分るであらう、苦に馴れるといふはいつも苦んで居るといふ事ぢや」といふ位であつた。極堂氏に發行を續けるやうに頼んだだけでも、一種の責任を感じて前より原稿を書くのに努力する居士としては、この病體を提げて絶対責任の地位に立つことを躊躇するのは、寧ろ當然と云はなければならぬ。

けれども「ホトトギス」の東遷は遂に實行された。はじめはこの機會に雑誌の名も改め、面目

一新するつもりであつたらしいが、結局いゝ思ひつきも無い爲、「ホトトギス」の名を繼續して、松山で出た間の二十號までを第一巻とし、東遷後を第二巻と改むることに落著いた。

「ホトトギス」東遷の事が決してから、居士が各方面に發した手紙を見ると、殆どどれも「ホトトギス」に關することが記されてゐる。「死地に踏み込む心持」と云ひ「死を決し申候」と云ふやうな言葉が見えるのも、居士に在つては決して誇張の言ではない。それだけ將來の責任を豫想してかゝつたので、輕々に著手せず、一大決心を要した所以もこゝに存するのである。一度決心した以上は、雜誌の體裁から原稿の取捨に至るまで、悉く居士自身當らなければならぬ。中村不折、下村爲山（牛伴）兩氏の口畫が意に滿たぬ爲、畫き直しを頼んだりする事件もこの間に起つてゐる。何事もいゝ加減に濟すことの出來ぬ居士は、不折氏の書いてくれた廣告の文字まで、自分で書き改めたものに替へるほどの熱心さであつた。

### 散文に於ける新天地

「ホトトギス」第二卷第一號は十月に入つて發行を見た。色刷の表紙、石版の裏畫、寫眞版の口畫、すべて面目一新した上に、紙數も松山時代に比べるとよほど多くなつた。居士がこの號の爲に筆を執つたものは、次のやうな多種類に上つてゐる。

ほとゝぎす第二卷第一號の首に題す（某）

古池の句の辯（獺祭書屋主人）

俳諧無門關（俳狐道人編）

小園の記（子規子）

土達磨を毀つ辭（子規子）

花賣の歌、豐年の歌（竹の里人）

蕈狩（竹の里人）

朝顔句合（子規判）

俳句分類乙號（獺祭書屋主人）

この外從來の「輪講摘録」を「蕪村句集講義」と改めて、その筆記も居士が書いてゐるし、「文學美術漫評」の中にも「ねずみ」の名で何か書いてゐる。正に三面六臂の働である。居士は最初

虚子氏に對して「初は俳句が主になること勿論であるが少くも韻文だけは包含して置きたい、今少し小生をして望ましめば初めから新體詩と歌と俳句と平等にやつて行きたい（小説杯はあつてもなくても善い事として）併し俳句さへ困難なのだからとても其外は覺束無い、矢張り俳句八分其他二分位で始めねばなるまい」と云つてゐたが、その割合はともかく、文學の範圍は畧々豫定通り備つてゐると云はなければならぬ。

「古池の句の辯」は嘗て「芭蕉雜談」に於て説いたところを、更に委しく、更に歴史的に述べたものである。古池の句の評論としては最も精到なるもの、一であらう。「土達磨を毀つ辯」は題名を見てもわかるやうに、在來の俳文系統に屬するものであるが、「小園の記」は居士の手によつて新に生れた美文である。かういふ種類の文章は居士の從來書いたもの、中には見當らない。二三箇月前に發表された「十年前の夏」と對比しても、その差は明に看取することが出来ると思ふ。

この號の爲山氏の口畫は「豊年」不折氏のは「菌狩」であつた。新體詩「豊年の歌」及「蕈狩」の和歌は、いづれもこの口畫に因んだものである。「俳句分類」の項目と、その次の募集句の題とは必ず同じものが選んである。「俳句分類」は單に古句を示すにとゞまらず、作者者に取つては一種の作例にもなつてゐる。かういふ點に關して居士は常に周到の用意を怠らぬ人であつた。

多大の努力を覺悟し、多大の努力を拂つただけあつて、東遷後最初の「ホトトギス」を手にした時は、居士も愉快を禁じ得なかつたらしい。虚子氏に寄せた手紙の封筒に「天氣はよくなる雜誌は出来る快々」と書いて來たほどであつた。韻文だけは包含して行きたいといふ最初の豫定も、和歌や新體詩は後援續かずの感があり、居士自身も三號までで新體詩の作を絶つやうな結果になつてしまつたが、豫定以外に新天地が開拓されたのは散文の方面である。松山時代の「ホトトギス」には時に紀行とか、隨筆とかいふ種類の文章が見えるだけで、居士もこの方面には手を著けたことが無かつた。然るに東遷後は「小園の記」を振出しにして、「車上所見」「吾幼時の美感」といふ風に、號を逐うてこの種の文章を掲げた外に、毎號「雲」とか「山」とかいふ題を課して短文を募つてゐる。一行乃至數行の短文を主としたものであるが、追々長い文章が加はつて來て、從來に無い自由な表現を試みることになつた。後年單行本にするに當つて、「小園の記」風のものゝ「寒玉集」と名づけ、短文の方を「寸紅集」と名づけた。居士の唱道した寫生文なるものは、大體この二つの流から生れたので、その端緒は東遷直後の「ホトトギス」に已に見えてゐる。

新體詩にしても「ホトトギス」所載のものは概ね短く、在來の作品のやうに一篇の趣向が目に立たなくなつて來た。その代表的なものとして、最も短い一篇を掲げるならば次の如きもので

ある。

## 芒 老 ゆ

芒老いて菊はつぼむ  
 萩を刈りて菊は開く  
 白き薔薇に晴るゝ小雨  
 葉雞頭に散る夕榮  
 蝶來らず居らざる蜘蛛  
 静かなるは秋行く園  
 くさる落葉うるほふ土  
 四十雀はひそかに在り  
 病みて三年庭を踏まず  
 窓にもたれ景を弄す  
 雲は過ぐる上野の杉  
 山氣骨にしみて寒し

押韻の迹はこゝにも見えるが、眼前小園の風物の外、何者も取入れてゐない。かういふ傾向を更に進めて行つたら、或は寫生文に併行すべき寫生詩が生れてゐたかも知れぬ。居士がこの邊を限りとして新體詩に遠ざかつたのは、さういふ野心を捨てたといふよりも、病牀筆硯多忙の結果、餘力が及ばなくなつたものと解すべきであらう。

この年後半に於ける「ホトトギス」以外の仕事はあまり多くない。歌の調子を論じた「五七五七七」とか、「心の花」の歌を評した「一つ二つ」とか、天長節に因んだ「賀の歌」とかいふものが「日本」に掲げられてはゐるが、前半期の歌論の華々しかつたのに比べると稍々寂寞の感がある。「日本」に出る歌も九月以後は著しく減少した。上野元光院に月を見、「立待月」百句を「日本」に掲げた時も、俳句ばかりで文章は無かつた。「日本人」に寄せた新體詩「菊合せ」は一年ぶりの作品であつたが、これ以後「日本人」には何も出なくなつてゐる。他の方面の仕事が減少したのは、「ホトトギス」に精力を傾注した爲に外ならぬ。

三十一年は多事であつたに拘らず、居士の身邊は比較的無事であつた。年末に虚子氏の贈つた鴨を室内の盥に浮べ、燈下におつとしてゐる鴨の様子に目を遣りながら、夜遅くまで筆を執つたりするうちに、この年は靜に暮れてしまつた。

## 明治三十一年

### 歌 人 來 訪

明治三十一年（三十三歳）の初も比較的平穩であつた。鹽に飼つた鴨を鷄南翁の池に放つ爲、居士も人の背に負はれて行つて、「鴨の羽ばたき幾度となくしては遂に石の上で安らかに眠つて居たのを見とゞけて」歸つて來た。人の背に負はれてにもせよ、元日匆々戶外に出るなどといふことは、何年にもなかつたことであらう。

一月の「ホトトギス」に居士は「明治三十一年の俳句界」及「俳句新派の傾向」を掲げた。今

まで「日本」に掲げてゐた前年俳句界の總評を「ホトトギス」に移したのは、俳句方面の仕事が大體こゝに集中された爲であらうが、三十一年の俳句界に就て居士の説くところは極めて簡單であつた。力を用ゐたのは寧ろ「俳句新派の傾向」の方で、居士はこの一篇に於て「明治二十九年の俳諧」以來の精細な批評を試みた。居士は先づ明治俳句の複雑性を古句に對比して説き、二箇の中心點を有する句とか、人事を詠じた句とか、印象明瞭の句とかいふに及んだが、特に明治の新趣味として擧げたのは、曖昧未了の裡に存する微妙な感を捉へた句で、油畫に於ける紫派、小説に於けるスケッチ的短篇などと共通する傾向だと云つてゐる。例へば虚子氏の「宿借さぬ蠶の村や行き過ぎし」といふ句の如きもので、これを蕪村の「牡丹ある寺行き過ぎし恨かな」宿借さぬ火影や雪の家つゞき」等の句に比べれば、その差は自ら明瞭になる。「行き過ぎし恨をいふにもあらず、宿借さぬ時の光景を述ぶるにもあらず、蠶飼に宿ことわれし前の村は既に行き過ぎて、宿借すべき後の村は未だ來らず、過去を顧みず未來を望まず、中途に在りて歩む時、何となく微妙の感興る。芭蕉其角は勿論、蕪村太祇もこゝに感得する能はざりしなり」といふのである。普通の讀者はこの種の句を讀んでも、さほどに興味を感じず、明治俳句の新趣味がかういふ曖昧未了の間に存するなどは氣がつかずに通過してしまふ處がある。居士が力説したのはその爲な



ので、「俳句新派の傾向」一篇は明治俳句の研究者に對し、多くの示唆を與へるものゝやうに思はれる。

この月「俳諧叢書」の第一編として「俳諧大要」がほととぎす發行所から刊行された。

二月は居士が前年「歌よみに與ふるの書」を公にした月である。居士の歌論は一世を聳動し、居士の作歌も「百中十首」以後引續き「日本」に現れたが、之に呼應して起つ者は存外多くなかつた。碧梧桐、虚子、露月等の諸氏の歌は「日本」にも「ホトトギス」にも出て居らぬことは無いが、子規庵に於ける歌會が一度開かれたきりで、その後絶えてゐるところを見ると、俳句のやうな熱は無かつたのであらう。然るにこの年の二月になつて、機運は俄然到來した。香取秀眞、岡麓の諸氏が居士を訪ねるやうになつたのがそれである。

香取氏等は前に「うた」といふ雑誌を出してゐたことがあり、三十二年一月からは雑誌「ころの華」の編輯員に名を列ねてゐた。年に因んで三十二番歌合なるものを作り、山本鹿洲氏を使者として居士の判を乞うたのは、この年の一月中であつたが、それが最初の機縁になつて、遂に居士を訪ふに至つたのである。「歌よみに與ふる書」當時の反響は一時にとゞまり、眞に歌を作らうとする仲間を見出しかねてゐた時分だから、この訪問はひどく居士をよろこばした。自ら師

長を以て居らぬ居士は、當時香取氏等のやつてゐた「新月集」といふ互選の巻にも直に歌を寄せ、香取、山本兩氏が鑄金家であるところから、鑄物に關する話を興味を持つて聞く、といふ調子で直に親しくなつた。

二月の「ホトトギス」に出た「繪あまたひろげ見てつくれる歌の中に」といふ十首は香取、岡兩氏が訪問する以前のもので、この年になつて最初の歌であるかどうかからぬが、とにかくこれ以前に發表されたものは見當らぬやうである。

なむあみだ佛つくりがつくりたる佛見あげて驚くところ  
もんごるのつは者三人二人立ちて一人坐りて楯つくところ  
岡の上に黒き人立ち天の川敵の陣屋に傾くところ  
あるじ馬にしもべ四五人行き過ぎて傘持ひとり追ひ行くところ  
木のもとに臥せる佛をうちかこみ象蛇どもの泣き居るところ  
うま人のすそごのよそひ駒立て、遠くに人の琴ひくところ  
かきつばた濃きむらさきの水満ちて水鳥一つはね搔くところ  
いかめしき古き建物荒れはて、月夜に獅子の壇登るところ

屋根の無き屋かたの内にをとこ君姫君あまた群れゐるところ  
看板にあべかは餅と書きてありたび人ふたり餅くふところ

此等の歌は居士の創意に出づるものであらう。すべてが畫の内容を説明する程度でなしに、鮮にポイントを捉へて生々と表現してある。従つてこの歌を誦むと、まだ見ぬ畫が直に眼前に繰りひろげられるものゝ如く感ぜられる。畫の内容は一枚づつ異つてゐるが、全體を貫くものゝあることは、「足立たば」「われは」等の歌と同じである。居士の歌として注目すべきものゝ一たるを失はぬ。

### 「萬葉集卷十六」

二月二十七日から三月一日まで、三回に互つて居士は「萬葉集卷十六」を「日本」に掲げた。歌論の當初に於て萬葉集の尊重すべきを論じ、「五七五七七」の中でも調子の問題に關して述べてはあるが、いづれかと云へば断片的な見解が多く、稍々纏つたものとしてはこの「萬葉集卷十六」である。

### 一「六 十 卷 集 葉 萬」一

がはじめである。居士は劈頭先づ「萬葉集は歌集の王なり」と喝破し、萬葉崇拜を以て任ずる眞淵を評して「萬葉を解せざる者と斷言するに躊躇せざるなり」と云つてゐる。眞淵は趣向の半面を見て調子の半面を見得なかつた、萬葉集の歌は如何なる凡歌と雖も、眞淵の歌のやうに調子の抜けたものではない、況んや眞淵は趣向の半面すらその一部分を得たに過ぎぬ、萬葉の歌は眞淵の歌の如く變化の少いものではない、その證據は卷十六を閑却してゐるのでわかる、といふ論法である。

眞淵以後萬葉を貴ぶ者多少之れ有り。されども其萬葉に貴ぶ所は其簡淨なる處、莊重なる處、高古なる處、眞面目なる處に在りて、曾て其他を知らざるが如し。簡淨、莊重、高古、眞面目、此等が萬葉の特色たる事は余亦異論無し。萬葉二十卷、殊に初の二三卷が善く此特色を現して秀歌に富める事は余も亦之を是認す。只萬葉崇拜者が第十六の卷を忘れたる事に向つて余は不平無き能はず、寧ろ此一事によりて余は所謂萬葉崇拜者が能く萬葉の趣味を解したりや否やを疑はざるを得ざるなり。

萬葉尊重は居士の見識であつた。而して所謂萬葉崇拜者と伍を與にしなかつたのは、更に居士の見識と云はなければならぬ。眞淵の説で事足るやうな萬葉論ならば、居士は最初から聲を大に

する必要を認めなかつたであらう。

居士は世人が卷十六の歌を採らざる理由を以て趣向の滑稽なる點に在りとし、日本人が一般に眞の滑稽趣味を解せざることに言及した。眞面目の趣を解して滑稽の趣を解せざる者は共に文學を語るに足らぬ、否、滑稽の趣を解せなければ、眞面目な趣を解することも出来ない、といふのである。殊に卷十六の特色は滑稽に限られたわけではない。「複雑なる趣向、言語の活用、材料の豊富、漢語俗語の使用、いづれも皆今日の歌界の弊害を救ふに必要な條件ならざるはあらず。歌を作る者は萬葉を見ざるべからず。萬葉を読む者は第十六卷を読むことを忘るべからず」といふのが居士の結論であつた。

一 年 二 十 三 治 明 一

「萬葉集卷十六」を草してから間もなく、居士はパリ滞在中の福本日南氏に一書を送つた。書簡の末に「イタツキニワレハフシアルフランスノタマノウテナニキミハスムトフ」の一首が記されてゐたのに對し、日南氏が「暫待て萬葉十六茶漬飯食ひては語り語りては食はん」と酬いたのは、遂にパリに在つて居士の所論を読み、共鳴するところがあつたものであらう。日南氏は愚庵和尚と同じく、居士の先輩の中で最もよく萬葉を解し、萬葉調の歌を詠む一人だつたからである。

三月十四日、子規庵に歌會を催した。この前俳人ばかりの歌會を開いてから、丁度一年ぶりのわけであるが、この時は俳人側は殆ど加はつてゐない。香取秀眞、岡麓、山本鹿洲、木村芳雨、黒井恕堂の諸氏のうち、恕堂氏の外は皆新月集の仲間である。この歌會の記事はどこにも發表されなかつたが、居士の「垣」の歌は「日本」に、その他の人の歌の一部は「ホトトギス」に載せられた。

一「六 十 卷 集 業 萬」一

三月二十日漱石氏宛の手紙を見ると、「ホトトギス」の原稿などでも、四頁以上のものを書く場合には何時も徹夜する、「小生は前より夜なべの方なれども身體の衰弱する程愈々晝は出來ず、夜も宵の口は餘り面白からず、十一二時頃の頃よりやう／＼思想活潑に相成候、徹夜の翌日は何も出來ず不愉快極り候、翌夜寐て其又の日は又原稿のために徹夜せざる可らざるやうに相成、月末より月始にかけては實に必死の體に候」と書いてある。年始以來寒氣に惱まされて終日臥褥すること少くないといふが、それほど元氣が無かつたわけでもない。殊にこの二三日前には車で神田まで出かけ、虚子氏が不在であつた爲、飄亭氏のところで蒲焼を食べたりした。これが「今年初の旅」とある。それ以前引籠つてゐたのも主として寒氣を恐れたので、病氣に累せられたのではなかつた。

## 「曙 覽 の 歌」

三月に入つてから久々に「病牀謔語」といふ隨筆を「日本」に掲げつゝあつた居士は、その稿の了らぬうちに、「曙覽の歌」なるものを載せはじめた。居士が實朝以後に於てすぐれた歌人を求めんとし、作品を點検しては失望を繰返してゐた消息は、「曙覽の歌」冒頭にある數行の文字がよく之を傳へてゐる。

余の初めて歌を論ずる、或人余に勸めて、俊頼集、文雄集、曙覽集、を見よといふ。其斯くいふは三家の集が尋常歌集に異なる所あるを以てなり。先づ源俊頼の散木奇歌集を見て失望す。いくらかの珍しき語を用ゐたる外に何の珍しき事もあらぬなり。次に井上文雄の調鶴集を見て亦失望す。これも物語などにありて普通の歌に用ゐざる語を用ゐたる外に何の珍しき事もあらぬなり。最後に橋曙覽の志濃夫廼舍歌集を見て始めて其尋常の歌集に非ざるを知る。其歌、古今新古今の陳套に墮ちず、眞淵景樹の窠臼に陥らず、萬葉を學んで萬葉を脱し、

瑣事俗事を捉へ來りて、縦横に馳驅する處、却て高雅蒼老些の俗氣を帯びず。殊に其題目が風月の虚飾を貴ばずして、直に自己の胸臆を擴く者、以て識見高邁、凡俗に超越する所あるを見るに足る。而して世人は俊頼と文雄を知りて、曙覽の名だに之を知らざるなり。

居士が俊頼、文雄に就て云ふところは漫然たる罵倒ではなかつた。「散木奇歌集」にしる、「調鶴集」にしる、居士は皆精讀の上、手抄を作つてゐる。自己の敬意を拂はぬ作家の者に對しても、この種の勞を敢てすることは、「俳句分類」や「俳家全集」が蒼虬、梅室等の作品を逸して居らぬのと一般である。たゞ「歌よみに與ふる書」に於て大上段に構へた居士としては、「散木奇歌集」や「調鶴集」で満足するわけに行かない。「志濃夫廼舍歌集」に至つてはじめて論ずるに足るものに逢著したのである。

「曙覽の歌」は前後九回に互り、相當長いものであるが、曙覽の人物と歌とを紹介するにはじまり、その歌に對する批評を以て了つてゐる。居士は「曙覽の貧は一般文人の貧よりも更に貧にして、貧曙覽が安心の度は一般貧文人の安心よりも更に堅固なり」と云つた。曙覽の「獨樂陰」の中に饅頭、焼豆腐を詠じてゐることに就て、陽に清貧を樂んで陰に不平を蓄ふる似而非文人の到底よくせざるところとし、「彼等は酒の池、肉の林と歌はすんば必ずや麥の飯、藜の羹と歌はん。

饅頭、焼豆腐を取つてわざ／＼之を三十一文字に綴る者、曙覽ありて始めて之れ有るべし。あら面白の饅頭、焼豆腐や」と断じたのは、俳句の月並に對するのと同じ見解である。

居士は進んで「安心の人に誇張あるべからず、平和の詩に虚飾あるべからず」と云ひ、曙覽を以て一點の誇張虚飾無きものとした。松平春嶽が曙覽を聘せんとし、曙覽が固辭して應じなかつた一事を評して「文を賣りて米乏しきを歎き、意外の報酬を得て思はず打ち笑みたる彼は、此に至つて名利を見ること門前のくろの糞の如くなりき。臨むに諸侯の威を以てし、招くに春嶽の才を以てし、而して一曙覽をして破屋竹笋の間より起たしむる能はざりし者何が故ぞ」云々と述べたのは、やがて居士自身世に處する態度に觸れて來るものでなければならぬ。

曙覽の歌が比較的何集の歌に似てゐるか云へば、云ふまでもなく萬葉集である。曙覽が歌の材料として取り來る者は、多く「自己周圍の活人事活風光」であつて、「題を設けて詠みし腐れ花腐れ月」ではない。實地を離れぬ曙覽の歌の中でも、飛驒の鑛山を詠んだ八首の如きは、殊に珍重すべきものであるが、客觀的景象を詠する點にかけては、新材料を入れた事に於て、趣味を捉へた事に於て、萬葉より一步を進めると同時に、新言語、新句法を用ゐた事に於て、一般歌人よりは自在に言ひこなすことが出來た。殊に見る所、聽く所、觸るゝ所悉く歌にする、歌想の豊富

なる點にかけては、單調な萬葉の如きものではない。——居士はかういふ風に曙覽を論じて來て、最後に調子の問題に及んだ。全體の調子から云ふと、曙覽は萬葉に及ばず、實朝に劣る、「惜む可き彼は完全なる歌人たる能はざりき」といふのである。

曙覽の歌は概して第二句が重く、第四句が軽く、結句は力弱くして全首を結び得ぬものが多い。所謂「頭重脚輕」である。頭重脚輕の歌は萬葉に無いのは勿論、古今にも無い。徳川時代の末、漸く複雑な趣向を取るに至つてこの風を生じたので、曙覽も亦これを免れぬ。彼が完全なる歌人たり得ぬのは、調子を解せぬ爲といふことになるのである。この調子の問題は居士の最も意を用ゐたところで、當時の歌壇の多く顧みぬところであつた。

曙覽は居士によつて發見された歌人ではないが、大に世に顯れるに至つたのは居士の評論が出發からである。居士はとにかくこの人を得て「實朝以後只一人」と稱することが出來た。楳取魚彦を「徒に萬葉の語句を摸して萬葉の精神を失へるもの」として斥け、語句を摸せずして却つて萬葉の精神を傳へた——思ふまゝを詠んで自ら萬葉に近づいた曙覽を揚げたところに、居士の進歩的な意見が窺はれる。

## 牡丹の前に死なんかな

居士は和歌に於て曙覽を論ずると殆ど同時に、俳句の方面に於ては「俳人太祇」を草して太祇の價値を宣揚した。太祇の句は曙覽の歌ほど世に知られなかつたわけではないが、伎倆に伴ふだけの名聲は得られなかつた。天明に重きを置く居士の書いたものを見ても、これ以前には太祇の名はあまり見當らぬ。居士が太祇の特色の一として趣向の複雑といふことを挙げた中に、「中には今日の新派と極めて似て居る者もある。今日新派の人も太祇の句を研究したといふではない、太祇のえらいといふ事を知つたのも去年位の事からであるから、特に太祇を學んだといふ譯は無いが、いはゞ太祇は新派の先鞭を著けて居たのである」といふことが見えるから、明治になつてからも久しく顧られなかつたのである。畢竟その作品を纏めて見る機会が與へられなかつた爲であらう。

「俳人太祇」は太祇の句の特色を、各方面から一々實例に就て論じたので、居士一流の行届いた文章であるが、特にその見識を見るべきものは、總括的に蕪村、太祇の比較を試みた一段と、所謂天明調の先驅者として移竹の名を擧げてゐる點とに在る。今日になつて見れば、太祇は實力相當の名聲を得てゐるから、格別の事も無いやうなもの、「蕪村を除けば天下敵無し」の彼が蓼太、曉臺、關更の下積になり、蒼虬、梅室よりも世人に知られて居らぬ状態を見ては、慨然たらざるを得なかつたであらう。居士が太祇の不遇に同情した最初の一節と、「長く地中に埋れて居た者が忽ち明るみに出た時には、其光が殊に強く感ぜらる。吾々が今日太祇に對する感じはその通りであるが、若し世人が此と同じ感を感じた時があつたら、其時が則ち太祇が眞成の名譽を得た時である」といふ結論とは、尋常研究者に求むべからざる熱を有してゐる。居士は單に古人を紹介するの域にとゞまらず、古人を活し得る人であつた。

居士が夜を徹して書いた「俳人太祇」は先づ三月の「ホトトギス」に載せられ、翌年二月「太祇全集」を「俳諧叢書」の一として出版するに當り、これを附録にした。「太祇全集」を讀む者に取つて、この一篇が何よりの解説になつてゐることは云ふまでもない。

四月の「ホトトギス」から居士は「隨問隨答」を連載しはじめた。松山發行時代に試みた「或問」を再興改題し、問の來るに従つて明快な啓蒙的解答を與へようとしたのである。

厄月の五月は今年は無事でなかつた。五日頃から發熱が亂調子になり、三日も四日も睡ることが出来ず、腰痛も亦烈しい。一切の食物を廢して、牛乳と菓物だけを攝るといふ始末になつた。九日になつて把栗、鼠骨兩氏が牡丹の鉢を持つて見舞に來たので、この日から「牡丹句録」を草することにしたが、次の一節は十日の日に吉野左衛門氏をして筆記せしめたものである。

あまりの苦しさを思ふに、何んの爲にながらへてあるらん、死なんかく、さらば藥を仰いで死なんと思ふに、今の苦しみにくらぶれば、我が命つゆ惜からず、いで一生の晴れに死別會といふを催すも興あらむ、試にいはいはゞ、日を限りて誰彼に其旨を通じ、參會者には香奠の代りに花又は菓を携へ來ることを命じ、やがて皆集りたる時、各々死別の句をよみ、我は思ふまゝに菓したゝかに食ひ盡して腸に充つるを期とし、其儘花と菓の山の中に、快く藥を飲んですや／＼と永き眠りに就くは、如何に嬉しかるべき。

「林檎食ふて牡丹の前に死なんかな」の句はこの時に成つたので、この句を解するには死別會の事を考慮に入れる必要があらうと思ふ。

牡丹は三日目の十一日に散つてしまつた。「三日にして牡丹散りたる句録かな」の一句を以て「牡丹句録」は了つたわけである。發熱の方はまだ續いてゐたが、二十日過には無くなつて食慾

も殆ど平生に復するに至つた。三十年の容體に似てはゐても、今度はよほど輕くて濟んだ。

「牡丹句録」は六月の「ホトトギス」に掲げられた。この牡丹は別に八首の歌となつて、少し後の「日本」に出てもゐる。この病により居士は暫く筆硯を廢せざるを得なかつたが、虚子氏が病氣で入院した爲、「ホトトギス」の原稿だけは、病をつとめて口授したりした。「小生病氣したら貴兄一人でやらねばならぬ、貴兄病氣したら小生一人でやらねばならぬ」といふ居士の懸念が忽ち實際に現れて來たので、兩者同時に病むといふことは居士も豫想の外だつたかも知れぬ。漱石氏が『小説「エイルキン」の批評』といふ長い原稿を熊本から寄せて、「ホトトギス」の卷頭を埋めたのはこの際の事であつた。

## 出 遊 類 々

「牡丹句録」を記念として厄月を切抜けた居士は、後半期に至つて元氣を取戻した。三月、四月と催したきり、又中絶になつてゐた歌會を七月から毎月開くこととし、その結果を「日本」に發

表する。「歌話」を連載する外に「夏の草の花」「病牀瑣事」等の隨筆が出る。「ホトトギス」にも従前通りいろ／＼なものを發表するやうになつた。

「歌話」を草せんとしてはじめて田安宗武の歌を見、「驚喜雀躍に堪へず」車を驅つて神田に虚子氏を訪うたのは八月二十三日であつた。この日の事は「ぬざり車」といふ文章に盡されてゐる。颯亭氏に「どうして來た」と云はれて、「宗武にうかれて來た」と答へたほどで、動機は正にそこに在つたが、一旦外に出るとなると、沿道にあるものを一物も逸さぬやうに觀察する。夜になつて歸る車上でも、北方の空に稻妻の閃くのを見て、稻妻十句を考へるといふ風であつた。一年何回といふ居士の外出は、常人の想像を許さぬ重要なものだつたのである。

田安宗武の「天降言」はいたく居士をよろこばした。勁健にして高華、古雅にして清新なる特色の外に、一見平凡のやうな歌を擧げて、その平凡の竟に平凡ならず、及び易からざることを論じたのは、居士の眼孔の一等地を抽く所以であらう。「宗武は萬葉を學んで其骨髓を得たる者、其歌多くは萬葉調なり。されど萬葉を固守して其範圍を脱する能はざりしが如き無能者にはあらず」と云ひ、萬葉以外に得たるものとして、三句切の多いこと、てには止の多いことを算へてゐる。これなども居士の意見として頗る味ふべきものがある。實朝以後に於て居士の第二に得た歌

人は宗武であつた。

八月二十八日、居士は杖を買ひ求めて羯南翁の許まで歩いて行つたが、途中で閉口して歸りは人の背に負はれて來た。「四年寐て一たびたてば木も草も皆眼の下に花咲きにけり」の歌、「杖によりて立上りけり萩の花」の句はこの際のものであらう。かういふよろこびも亦健康者の想像の外に在る。

九月二十八日には又遊意動いて「寐ながらに足袋はき帯結び」車で出た。この時は人を訪ふのでなしに、根岸の附近を廻つて歌を作るのが目的であつた。この紀行が「道灌山」一篇となつて「日本」に現れた。得るところの歌二十三首、外に俚歌が一つある。當時茅ヶ崎に病を養ひつゝあつた佐藤玉山(宏)はこれを読んで「四十度の熱を載せつゝ、車遣る道灌紀行見るもしづ心無し」の歌を居士の許に寄せ來つた。玉山氏は日本新聞の一人、専ら外交問題に筆を執つた人である。居士は「世も同じ病も同じしかれども我より若き君をあはれむ」の一首を贈つて慰めたことがあつたが、「道灌山」を読んで「しづ心無し」と氣遣つた人は、この年十一月十三日、三十歳を一期として遂に起たなくなつてしまつた。

闇汗會とか、袖味會とかいふものが催されたのもこの秋の事である。ほととぎす發行所即ち



虚子氏の許に集つた人達の中に、闇汁の催しが提議されて、各々買つて歸つたものを大鍋で煮て飽食するといふ事、醫者になつて歸國する露月氏を送るべく、道灌山に會した時、持寄の御馳走の中に柚味噌があつたといふ事、いづれも平凡な事柄に過ぎぬ。局外者から見れば樂屋落になりさうな事實を、「闇汁圖解」なるものを作つて、座席の模様と鍋に入れた品物を明にしたり、「何ぞ柚味噌と露月と相似るの甚しきや」といふやうなことから、送別の辭を繰出したりして、一篇を興味ある讀物としたのは慥に居士の手腕である。居士の天分の一面は、かういふ種類の文章によく發揮されてゐると云つても差支無い。

「小園の記」の系統に屬する文章は、その後居士によつて屢々試みられ、「夏の夜の音」などの如く聽覺のみを働かした文章も現れたが、この年十月の「ホトトギス」に出た「飯待つ間」に至つて、寫生文の新たな地歩は畧々定る觀があつた。朝飯を食はぬ居士が病牀に頼杖をついて、飯の出來るのを待ちながらぼんやり庭を眺めてゐる。その間の見聞を記したもので、極めて短い文章ではあるが、「くわツと疊の上に日がさした。飯が來た」といふ結末に至るまで、殆ど一點の隙も無い。猫をつかまへていちめる子供の聲の前後二度垣の外に聞えるのが、文章の山になつてゐる。かういふ家常茶飯事を捉へて、自由な、清新な、而も完成した一篇としたものは、居士以前の文

章には見當らない。居士としても「飯待つ間」あたりからはじまるものゝやうに思はれる。

居士が「ホトトギス」に期待した文藝のうち、新體詩が先づその影を消し、和歌も居士によつて僅に存続する形であつたが、この方は次第に「日本」に移り、居士の事業の兩輪である「日本」と「ホトトギス」とが自ら分野を異にするやうになつた。たゞ自然に芽を出した寫生文だけは、「ホトトギス」を地盤として成長の勢を示し、碧、虚兩氏の外に四方太氏の文章が現れる。新に東上して「ホトトギス」の編輯に従事した青々氏も書くといふ風で、漸く賑になつて來た。寫生文の歴史を顧る者は三十二年といふものを注意する必要がある。

### 歌會に於ける調子論

歌會は引續き催され、その結果は常に「日本」に發表された。はじめは兼題の歌を持寄り、席題の歌と共に當日之を選んでゐたのを、十一月の歌會から兼題は俳句の十句集と同じく、廻送して互選することにした。歌會記事の特色は悉く居士の筆に成つたこと、兼題乃至席上の歌に對

し、居士の批評が加へてあることである。俳句會の場合に於ても席上では種々の批評があり、十句集などの句に居士が批評を加へるのは珍しいことでも無かつたが、さういふ批評は概ね世の中に發表されずにしまつた。居士が歌會の場合に自ら記事を書き、批評を加へることを怠らなかつたのは、研鑽の迹を記録するといふだけでなしに、居士の歌に關する意見を實例に就て世に示す意圖があつたものであらう。

十二月の歌會の席題に「帝國議會」といふのがあり、和田不可得氏が「すめろぎのまけのまにまにかしこみて國はからずば此國をいかに」といふ歌を詠んだところ、居士はこの一首に就て從來に無い長い批評を書いた。「抑も昨年和歌革新の聲起りしより今日に至る迄の有様を見るに、幾多革新派の人が和歌に於て最多く革新の必要を感じしは想の上に在りて調の上に在らず」と云ひ、「東に倒れし者を起さんとして又西に傾かしむるは勢の免れざる所、何事を爲すにも初期に於て必ず此弊を見る。獨り和歌に於て咎むべきにあらず、否咎むべきにあらざるのみならず、寧ろ必要なりしなり。然れども彼等は只病を救ふに急なるがために即ち新思想を入るゝに急なるがために、其新思想を如何なる調にて歌はゞ可なるべきかといふ問題には未だ觸著せざるが如し。こは我最遺憾とする所なり。想と調と孰れか重くして孰れか輕き、そは我れ答へ能はず。輕重は

答へ能はずといへども、兩者共に必要にして偏廢する能はざるは論を竣たす。既に歌の一要素として存する間は、其歌を作るに調をなほざりにして、只三十一文字に綴るを以て満足するが如きは到底完全なる歌といふべからず。自ら新派と稱する人の作歌に調のとゝのひたる者甚だ少きを見て、新派も猶未だ不具を免れずと思へり」と云ふのである。調子に關しては屢々説があつたが、この時ほど多くの言辭を費したことは無かつた。調子を解せざるが故に、曙覽を「完全なる歌人たる能はざりき」と評した居士は、同じ標準を以て自家陣營に臨む時、やはり同様の感無きを得ぬ。たまく不可得氏の歌の如く「趣向尋常にして調のとゝのひし者」が歌會の高點を得るのを見て、その傾向をよるこんだ結果、如是の言を吐いたのであつた。

十一月十三日、居士は本郷金助町に岡麓氏の新築を訪ひ、同十六日小石川原町に香取秀眞氏を訪うた。病臥以來、居士の訪問する先は大體限定された觀があつたが、こゝに至つて歌の方の人を訪ふといふ事實が新に起るのである。いづれも午後から出かけて、夜に入つて歸つてゐる。かう續けて車上出遊を試み得たのは、あまり寒氣が加はらぬ爲もあるが、「遊びある病の神のお留守もり」といふ句を見てもわかるやうに、この時分比較的健康的の工合がよかつたからであらう。この二度の外出は「本郷まで」「小石川まで」といふ歌入の文章となつて「日本」に現れた。麓氏の

許で見た古人の筆蹟、秀眞氏のところで見た鑄物のくさんなど、共に居士をよろこばせた。歸來秀眞氏に寄せた端書の歌の中に「我口ヲ觸レシ器ハ湯ヲカケテ灰スリツケテミガキタブベシ」といふのがあり、特に圈點がつけてあつたのは、はじめて訪問した家に對する居士の心遣ひを見るべきものである。病人としての居士のかういふ注意は、翌三十三年一月の「ホトトギス」の消息に、かなり委しく述べてある。

### ガラス障子の出現

この年後半に於ける新な出來事の中に居士の畫がある。居士が畫を好むの性は少時からで、明治十一年（十二歳）の時模寫した「畫道獨稽古」なるものが現存して居り、「吾幼時の美感」の中にも「十二三の頃友に畫を習ふ者あり、羨ましくて母に請ひたれど、畫など習はずもありなんとて許されず。其友の來る毎に畫をかゝせて僅に慰めたり」といふことが見えてゐる。畫に對する居士の考の變遷は、「ホトトギス」に出た「畫」といふ文章に畧々盡されてゐるが、これには洋畫家

である不折、爲山兩氏の影響が大分あるらしい。この年三月、居士は「病牀讒語」の中で「文學者とならんか、畫工とならんか、我は畫工を擇ばん。文學は文字に縁あるがために時に無風流の議論を爲す。議論は一時を快にすといへども、退いて靜かに思へば畢竟兒戲のみ。繪畫は議論を爲す能はず。怒れば則ち畫き、喜べば則ち畫き、悲めば則ち畫き、平ならざれば則ち畫く。樂、默々の中に在り。唯我畫に拙く、畫工たる能はざるを憾む。若し自ら樂まんとならば畫の拙なるを憂へず。口を糊する能はず」と云ひ、又「我、畫を學ばんか、形體を摸するを要せず、輪郭を正すを要せず、只青を塗り紅を抹し黄を點すれば則ち足る」とも云つた。この時は直に實行に移す考があつたかどうかわからぬが、秋になつて圖らずも丹青を弄する機會が到來した。

居士がはじめて寫生を試みたのは秋海棠であつた。繪具は不折氏から貰つたのがあつたので、机の上に活けてある秋海棠をいきなり寫生したのである。その結果は「葉の色などには最も窮したが、始めて繪具を使つたのが嬉しいので、其繪を默語先生や不折君に見せると非常にほめられた。此大きな葉の色が面白い、なんていふので、窮した處までほめられるやうな譯で僕は嬉しくてたまらん」といふことになり、爾後屢々畫筆を執るやうになつた。文學以外の樂が一つ加はつたわけである。

十一月二十二日、虚子、四方太、青々三氏と共に「ふき脛」を食ひ、五目ならべなどを鬪はした時、皆で「根岸草廬記事」を書く議が起つた。四方太氏の文章がはじめて無條件で居士の鑑査を通過したのはこの時である。居士の書いた記事の中に、障子をあけては庭の雞頭を見る、雞頭の傍に赤い小菊のある小景を、畫にして置きたいと思つてゐるうちに、霜に打たれたかして見苦しい残骸になつてしまつた、といふことがある。この頃まで病室の南側は障子で、庭を見るにしても、上野の山を望むにしても、一々障子をあけて貰はなければならなかつたが、十二月十日頃に至り、こゝにガラス障子を取付けることになつて、病牀生活に一大變化を生じた。ガラス障子といふものが極めて普通になつた今日、殊に立つて歩ける健康者の立場から、この時の居士のよろこびを想像することは困難であらう。この新たな設備は直に句に入り、やがて歌にもなつたが、最も委しいのは三十三年一月の「ホトトギス」に出た「新年雜記」である。「ガラス障子にしたのは寒氣を防ぐためが第一で、第二には居ながら外の景色を見るためであつた。果してあたゝかい。果して見える」とあつて、病牀から見える風物を列擧した末、「これ等はガラス障子につきて略々豫想した事であつたが、其外に豫想しない第三の利益があつた。それは日光を浴びる事である」と云つてゐる。晝近い冬の日が六疊の部屋の奥までさし込む中に横はつてゐると、暖いばかりで

なしに非常に愉快な氣持になる。ガラス障子の出来上つた翌日の如きは、自分でガラスを拭いて見たり、菅笠を被つて机に向ひ、晝のうちに原稿を書くほど、居士は新なよろこびに充ちてゐた。「こんな譯ならば二三年も前にやつたらよかつたと存候、併し何事も時機が來ねば出来ぬ事と相見え候」と漱石氏宛の手紙に記されてゐる。

この年の蕪村忌は會者四十六人、空前の盛況を示した。「風呂吹の一きれづつや四十人」といふ句はこの際のものである。蕪村忌の翌日には湯婆を抱へて不折氏の晝室新築開に列席するなど、押詰るまで相當多事であつた。

「俳人蕪村」「俳諧三佳書」が「俳諧叢書」として刊行されたのも、この年十二月の出来事である。

## 明治三十三年

### 短歌募集と「叙事文」

明治三十三年（三十四歳）といふ年は、居士に取つて重大な意義を有する年であつたと思はれる。従来土に根をおろしてゐた居士の文學は、大體この年に於て收穫期に入つた観があるからである。

「新年雜記」に新年を迎へ得たよろこびを述べて、その底に「來年の正月に逢へるか逢へぬか」といふ大問題が首を出してゐることは誰も知るまいとあるが、這間の消息は健康者の解せぬところであらう。

さて此大問題に逢著したところで「なに今年も」とやつてのける勇氣は最早なくなつた。「初

曆五月の中に死ぬ日あり」とも詠んだ。併しそれは嘘だ。まだ五月なんかを終る氣遣は無い。とにかく來年の四月迄は生きる積りだ。といつては見たが「とにかく」「迄は」「積りだ」と

いふ言葉を省く事が出来なかつた。

居士は前年の正月に比して身體が餘計に弱つたと思ふと云ひ、元日の蜜柑の喰ひやうが少かつたと云つてゐる。前年後半が比較的無事だつたと云つても、病勢はその歩を停めてゐる筈が無い。「五月の中に死ぬ日あり」は三十二年初頭の「所思」であつた。例の厄月を思ひ浮べたので、果して「牡丹句録」前後の苦痛になつて現れたが、どうにか通過することが出来た。かういふ一年をうしろに背負つた居士が、更に新たな一年を前面に望んで、漠然たる不安を感じるのは當然の話である。

この年になつて第一に記さなければならぬものに、「日本」に於ける和歌の募集がある。従来俳句の方には「小日本」時代を除いて、特に題を課して句を募るといふことは無かつた。歌も「百中十首」以來、いろ／＼な歌が紙上に現れぬでもなかつたが、その多くは居士に和して起つた俳

人の作であつた。三十二年七月以來、短歌會の記事によつて、月々の作品と研鑽の迹とを發表するやうになつたもの、猶居士の身邊に集る人の作品のみに局限される憾があつた。短歌募集は歌に於ける居士の主張が那邊まで及んだかを見るべきものとして注目に値する。この募集は蜀南翁の舊案に基くものださうである。

前年十二月に募集され、この年の劈頭に發表された「新年雜詠」を振出しとして、「森」「櫻」「讀平家物語」といふ順序に次々と續けられて行つた。「新年雜詠」に伊藤左千夫の名があり、「森」に長塚節の名が見える。「櫻」に至つて藤真、安江秋水、葯房子（鈴木豹軒）等の作家が現れた。短歌募集の一事は少くとも從來短歌會に姿を見せなかつた作家を、居士の身邊に引付ける効果があつた。居士も「森」以後選者詠を掲げ、「櫻」及「讀平家物語」に就ては、募集歌に對する批評乃至感想を述べてゐる。

短歌募集と竝んで新に「日本」紙上に試みたのが文章の募集である。各地に於ける歳晚歲始の記事を募つたのであつたが、その結果は居士を満足せしむるものでなかつた。居士は是に於て自己の抱懷する文章上の意見を發表するの必要を感じ、「敘事文」なる題下に「日本」に連載した。敘事文の名は用ゐてあるけれども、實は所謂寫生文のことで、「作者若し須磨に在らば讀者も共に

須磨に在る如く感じ、作者若し眼前に美人を見居らば讀者も亦眼前に美人を見る如く感ずる」文章の長所を力説したものである。

居士は三十一年の末に「寫生、寫實」なるものを「ホトトギス」に掲げ、繪畫の寫生を論じたことがあつた。次いで寫實と小説との關係に及ぶ順序で、その旨が豫告してあつたに拘らず、續稿は遂に出ずに終つた。文章に關する居士の意見の纏つたものとしては、「敘事文」一篇を推さなければなるまいと思ふ。居士は文章に於ける虚敍（抽象的）を排し、實敍（具象的）によるべきことを主張した。虚敍は人の理性に訴へることが多いのに反し、實敍は之を感情に訴へる。虚敍は地圖の如く實敍は繪畫の如し。地圖は大體の地勢を見るに利あれども、或る一箇所の景色を詳細に見せ且つ愉快を感じしむるは繪畫に如く者なし」といふのである。この點に就て虚敍と實敍との相異を實際の文章の上で示し、如何に描くべきかといふ方法を示すのが「敘事文」一篇の主意であつた。かういふ文章上の主張は、已に「ホトトギス」に於て實行されてゐただけけれども、一般の理解するところとなるには大分の距離がある。「日本」に於ける歳晚歲始の記事が居士を失望せしめたのは、當時としては寧ろ已むを得ぬ結果だつたかも知れぬ。併しその失望が「敘事文」一篇となつて現れたことを思ふと、必ずしも無意義な試みではなかつた。

## 書 中 落 涙

二月十二日、居士は熊本の漱石氏宛に長文の手紙をしたゝめた。病中の心境をこまゝと述べたもので、「決して人に見せてくれ玉ふな。若し他人に見られてハ困ると思ふて書留にしたのだから」と断つてあるが、惻々として人を動かすところが多い。羯南翁に關する左の一節の如きは、特に看過すべからざる文字である。

「日本」ハ賣レヌ、「ホト、キス」ハ賣レル、陸氏ハ僕ニ新聞ノコヲ時々イフ（コレハ只材料ヤ體裁ナドノコ）ケレドモ僕ニ書ケトハイハヌ、「ホト、キス」ヲ妬ムトイフヤウナコハ少シモナイ、僕ガ「ホト、キス」ノタメニ忙シイトイフコハ十分知ツテ居ル故……………

……………（此間落泪）……………

僕ニ日本へ書ケトハイハヌ、ソウシテイツデモ「ホト、キス」ノ繁昌スル方法ナドヲイフ、ソレデ正直イフト「日本」ハ今賣高一萬以下ナノダカラネ（賣高ノコハ人ニイフテ呉レ玉フ

ナ）僕カライヘバ「日本」ハ正妻デ「ホト、キス」ハ權妻トイフワケデアルノニ、兎角權妻ノ方へ善ク通フトイフ次第ダカラ「日本」へ對シテ面目ガナイ、ソレデ陸氏ノ言ヲ思ヒ出ストイツモ涙ガ出ルノダ、徳ノ上カライフテ此様ナ人ハ餘リ類ガナイト思フ。（其陸ガ六人口ニ得タ長男ヲ失ツテ今日ガ葬式デアツタノダ、天公是カ非カナンテイフ處ダネ）

居士が社會の人となつて以來、日本新聞社員として終始した所以のものは、何よりも羯南翁の徳に感じたところが大きかつたらうと思ふ。羯南翁と居士との關係は、普通一般の社長對社員の如きものでなかつたのは勿論、性格が合ふとか、意見が一致するとかいふ點で結ばれてゐるものでもない。もつと深い情の契合であつた。夜半この一書をしたゝめるに當り、羯南翁の事を思ひ浮べて覺えず落泪するといふところに、津々として盡きざる情味が窺はれる。

同七手紙の中に

「日本」へ少シ書ク。歌ノ方ヲ少シ研究スルト歌ニノリ氣ガ出來テ俳句ノ方へ少シ疎遠ニナル（貴兄ノ謠ト俳句ト兩方へハトイツタヤウナ處デモアラウ）二月分ノ「ホト、キス」ノ原稿ハマダ一枚モ出來ンノダ。察シテクレ玉へ、僕ガ此無氣力デ此後一週間位ノ間ニ「ホト、キス」ヲ書イテシマハネバナラヌト思フテ前途ヲ望ンダ時ノ僕ノ胸中ヲ。

といふことが書いてある。「ホトトギス」二月號は遅延の爲遂に休刊し、三月號と合併して出すことになつた。居士はこの號の爲に「蕪の句」「奇想變調録」「一句二題」その他、比較的多くの原稿を寄せたが、これを境界として「ホトトギス」に居士の名を見ることが少くなつた。「俳句分類」もこの號限りで出なくなつてゐる。歌に力を用ゐるやうになつた結果、俳句の方に疎遠になつたところもあるかも知れぬが、それよりも居士の健康が以前のやうに諸事を併行せしむるわけに行かなくなつた爲だらうと思はれる。

「日本」には短歌會記事や募集短歌の外に、「短歌愚考」「草徑集を読む」「磐之屋歌集を読む」等、歌に關するものがぼつ／＼現れた。「草徑集」は大隈言道、「磐之屋歌集」は丸山作樂の歌集である。作樂は居士が當代の歌に於て、僅に敬意を拂ひ得た一人であつた。「要するに氏は歌人にあらず、従つて其歌變化に乏し。然れども飽くまで萬葉の高きを學びて今の世に得難き佳什を残したるは却て其歌人ならざりしがためのみ」と云つてゐる。當時の歌人の畠には居士を満足せしむる者は見當らなかつたのである。

### 未完の小説、焼かぬ自像

二月三月合併號を出した「ホトトギス」は、創刊以來最初の臨時増刊を發行して、之を補ふことになつたので、居士はその爲に小説「我が病」を草することを思立つた。「曼珠沙華」以來三年目の試みである。題名の示す通り、日清戰爭從軍を背景にした事實に、多少の小説的色彩を點じたもので、居士の自傳的な意味をなす上から云つても、極めて珍重すべきものであるが、惜むらくは金州の舍營までで筆を投じてある。居士はこの小説に於て、はじめて寫生文の筆法によつて事實を描かうとした。「我が病」の本题たる病がまだ顔を出してゐない位だから、果してどれだけの長さになる豫定だつたかわからぬけれども、若しこれが完成してゐたら、恐らく居士の作中第一の長篇になつたであらう。居士がこれまでに書いた小説とは、全くその世界を異にするものである。

「ホトトギス」の増刊は四月上旬に出る豫定であつたが、都合で六月に延期された。「日本」に出



た「週刊記事」の中に

三月二十九日（「我病」を草す）

ともし火のもとに長ぶみ書き居れば鶯鳴きぬ夜や明けぬらん

とあるから、この時分執筆にかゝつてゐたものであらう。「ホトトギス」の寫生文なるものは、從來短篇に限られてゐたが、寒川鼠骨氏の「新囚人」が出るに及んで、漸く長きに向はんとする勢を示した。「ホトトギス」の増刊が殆ど三篇の文章によつて埋められてゐる一事を見ても、慥にこの傾向を卜することが出来る。但「我が病」はこの號に間に合はなかつた爲、未完のまゝ遺ることになつてしまつた。

一 年 三 十 三 治 明 一

「我が病」は出来上らなかつたが、この時分の居士は、さう病苦が甚しかつたわけではない。四月中には粘土を捏ねて自像の首を造り、その首の置物裏を造り、湯さましやうの器を造つたりしてゐる。土は秀眞氏が今戸から壺に入れて齎したものであつた。前後三日を費して自像の首を造り上げた居士は、これを罐に入れて秀眞氏の許まで届けさせた。居士の考は窯で焼いて貰ふつもりであつたが、中が空虚になつてゐないから焼けにくい。首は焼かずに石膏に取ることになつた。この粘土細工に關し、居士は三回に亘つて歌の手紙を秀眞氏に寄せてゐる。粘土は骨が折れるせ

るか、晝ほど永續はしなかつたけれども、居士はかういふものゝ上に直に興味を發見し得る人であつた。

病室の前に金網の大鳥籠を据ゑたのも、やはり四月中の出来事である。或人の庭に捨て、あつたのを、淺井黙語（忠）氏の周旋で借りることになつたので、亞鉛屋根のついた、圓錐形の籠の中には、先づキンバラの雄一羽、ジャガタ雀の雌一羽、鶉の雄一羽が放たれた。居士はこの籠の中に五尺ばかりの李の木を植ゑ、來年の春花が咲いた時分に、花の中を小鳥の飛ぶ様を見るつもりであつたが、小鳥は木の葉を片端からむしつてしまふので、希望は全く外れてしまつた。この大鳥籠の歴史——最後にカナリヤが矮雞に變り、矮雞の聲も亦病牀の居士を惱ますやうになつて、遂に庭隅に移されるまでの變遷は、「病牀苦語」といふものに委しく述べてあるが、この大鳥籠の出現はガラス障子に次ぐ出来事であり、居士の眼を楽しませることも少くなかつたに相違無し。

一 像 自 ぬ か 焼 ・ 説 小 の 完 未 一

四月二十九日、好晴に乗じて本所茅場町に左千夫氏を訪問することになつた。左千夫氏が居士の許に來はじめたのはこの年一月の歌會からである。「人々に答ふ」の文中で「あまりの事に答へんすべも知らず」と云ひ、「明治の世に生れて斯かる言をいはるゝやうではチト頼もしくらぬなり。

今少し奮發して勉強せられては如何」と手厳しくやつ、けられた春園は、二年後に至つて居士の教を乞ふ人となつたのであつた。この日先づ到つた赤木格堂氏が一足先に行くことゝし、居士は秀真氏と共に車をつらねて出かけた。左千夫氏不在の爲、三人で龜戸天神に詣で、再び茅場町へ引返した。根岸へ歸つたのは夜半過だつたらしい。この日の記事が「龜戸まで」「車上の春光」の二篇になつてゐる。

### 歌の寫生的連作

俳句の會は月一回ときまつてゐたが、歌の方はさうでなくなつた。殊に四月以來萬葉集輪講が企てられるやうになつてからは、輪講に集つた顔觸だけで必ず歌を作ることになり、歌會は期せずして月二回になつた。五月二十日の如きは、萬葉集輪講のあとで「舟中作」十首を作つたところ、夜に入つて俄に雨となつた爲、左千夫、茂春、格堂、一五坊の諸氏は遂に子規庵に一泊した。翌日拂曉、庭前を眺めて先づ雨中即景の歌を作り、更に興に乗じて煙十首を作つた。從來短歌に

限られてゐた歌會の作品が、長歌、旋頭歌に及んだのはこの時である。

五月二十一日朝雨中庭前の松を見て作る

松の葉の細き葉毎に置く露の千露もゆらに玉もこぼれず  
 松の葉の葉毎に結ぶ白露の置きてはこぼれこぼれては置く  
 緑立つ小松が枝にふる雨の雫こぼれて下草に落つ  
 松の葉の葉さを細み置く露のたまりもあへず白玉散るも  
 青松の横はふ枝にふる雨に露の白玉ぬかぬ葉もなし  
 もろ繁る松葉の針のとがり葉のとがりし處白玉結ぶ  
 玉松の松の葉毎に置く露のまねくこぼれて雨ふりしきる  
 庭中の松の葉におく白露の今か落ちんと見れども落ちず  
 若松の立枝はひ枝の枝毎の葉毎に置ける露のしげけく  
 松の葉の葉なみにぬける白露はあこが腕輪の玉にかも似る

この一連の歌は雨中庭前の風物の中で、丈の低い若松に注意を集中し、その松の中でも雨の雫が松の葉に玉を結ぶといふ一點に觀察を注いだもので、そこに著しい特色がある。かういふ觀察

の微細に互つたものは、居士の歌に見當らぬのみならず、在來の歌人の窺ひ知らぬ世界であつた。この歌と相俟つて注意すべきものは左の一連の作である。

六月七日夜病牀即事

ほととぎす鳴くに首あげガラス戸の外面を見ればよき月夜なり  
 ガラス戸の外に据ゑたる鳥籠のブリキの屋根に月うつる見ゆ  
 ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびける見ゆ  
 ガラス戸の外は月夜をながむれどランプの影のうつりて見えす  
 紙をもてランプおほへばガラス戸の外は月夜をあきらけく見ゆ  
 浅き夜の月影清み森をなす杉の木末の高き低き見ゆ  
 夜の床に寐ながら見ゆるガラス戸の外あきらかに月更けわたる  
 小庇にかくれて月の見えざるを一目を見んとゐざれど見えす  
 照る月の位置かはりけん鳥籠の屋根に映りし影なくなりぬ  
 月照す上野の森を見つゝあれば家ゆるがして汽車往き返る  
 ほととぎすの聲が聞えたので、首を上げてガラス戸の外を眺めることにはじまる月夜の風物の

観察が遺憾なくこの一連に收められてゐる。ランプの光がうつる爲、ガラス戸の外が見えないので、紙でランプを蔽ふと、はじめて月下の物象が明に眼に入るといふ變化も面白いが、最初は見えてゐた月が何時の間にか庇に隠れてしまつて、病牀で身をゐざらせても眼に入らなくなり、鳥籠の屋根に映つてゐた月影も無くなつたといふ時間的推移の窺はれるのは更に面白い。吾々はこの一連の歌を読むことによつて、その夜の病牀の空氣を如實に感じ得るのである。文學に於ける寫生の主張が歌の上に現れたのは、固より此等の歌にはじまるわけではないが、十首をつらねて或場合の空氣を髣髴するといふ行き方は、この邊に至つて十分成功の域に達したもののやうに思はれる。

萬葉集論講は論講そのまゝの筆記でなしに、別に居士の「萬葉集を読む」となつて「日本」に現れた。「文字語句の解釋は諸書にくはしければこゝにいはず。只我思ふ所をいさゝか述べて教を乞はんとす」といふ態度を以て之に臨んだので、學者的講説を離れ、どこまでも歌として見る。解釋者の側から見る歌でなしに、歌を詠む者の側から歌を見るといふことが大きな特色をなしてゐる。萬葉集論講は九月まで引續き行はれたが、「萬葉集を読む」は前後四回「日本」に掲げられたに過ぎなかつた。「歌よみに與ふる書」を掲げて起つてから三年目で、漸く著手した萬葉集の細

評が、幾何も進行せず了つたのは、居士のみならず、歌界としても遺憾であつたと云はなければならぬ。

「萬葉集を読む」と前後して「短歌二句切の一種」「竹里歌話」等、歌に關する文章が「日本」に發表された。「日本」以外にも「心の華」「大帝國」「國力」などの如く、居士及短歌會の人々の作品を載せる雑誌の出來たことも、何となく居士の身邊を賑にした。前年あたりから地方に俳句雑誌の簇出する傾向があり、居士も交渉が無いではなかつたけれども、新に勃興せんとする過程にあつただけ、歌の方が活氣に充ちてゐた。短歌會の顔觸はさう増加したわけでもなかつたが、長塚節、安江秋水、森田義郎の諸氏の如く、有力な青年歌人の相次いで投じ來つたのも、活氣を加へた所以であつたらう。

六月三日に岡麓氏のところに園遊歌會があり、これに赴いたのが居士最後の外出であつた。即事十首の代りに成つた「歌玉」の歌は、前の松の露やガラス戸の月夜とは全く異つた種類のものであるが、一方に偏せざる居士の歌の世界を窺ふ上から看過すべからざるものであらう。歌玉の中に詠み込まれた歌人は、秀眞、左千夫、格堂、巴子、麓、茂春、節、一五坊、不可得、潮音、三子の十一人であるが、來會者は以上にとゞまらなかつたこと、思はれる。

### 咯血後の興津移轉問題

八月十三日の朝、居士は突然咯血した。二十八年以來の多量の咯血であつたので自他共に驚いたが、幸に一回だけで済んだ。歸省中の格堂氏が平賀元義の歌を發見して、居士の許に送り來つたのはこの際の事である。居士は直に端書を出してその歌を集めんことを勧め、「上ニシテ田安宗武下ニシテ平賀元義歌ヨミ二人」「血ヲハキシ病ノ床ノツレト、ニ元義ノ歌ヨメバウレシモ」の二首を書添へた。

咯血後は疲労甚しく、二十二日夜の蕪村句集論講の際にも、默聽して時に意見を述べるとゞめたほどであつたが、この間に在つて力めて筆を執つたのは「ホトトギス」九月號の「消息」である。六號活字で雑誌四頁に互る非常な長文で、咯血の前夜に筆を起し、十七日、二十日、二十一日、二十二日と四度稿を續ぎ、最後の一段は口授筆記せしめて漸く完成した。國語傳習所に行はれた俳句講習會の事に關し、門下の士の不勉強を警めるのが主なる目的であつたらしいが、一

轉して「俳句分類」の事に及んでゐる。自分の事業を新聞雑誌に現れた文字だけで測る人には、この三四年間に於ける事業は年々同一分量を示すものゝやうに思ふであらうが、その實自分の事業は三四年來、病氣の進歩と反比例に分量を減じてゐる、それは外面に現れぬ「俳句分類」が著しく分量を減じた故である、この事業は最近三四年の中に一年々々々と怠り勝になり、昨年以來は全く事業中止の有様になつてゐる、といふのである。「俳句分類」稿本の嵩は、見る者をして瞠目せしめねば止まぬものであるが、大體二十四年から三十二年に亙る、前後九年間の努力に成るものと見ていゝのであらう。

八月の咯血は外面に現れる居士の事業をも減少せしめずには置かなかつた。左千夫氏等の首唱にかゝる興津移轉問題はこの後に起り、居士の病軀を氣候の變化の少い、空氣のいゝ海岸の地に移して、來客その他の煩を逃れることにしたらどうかといふことになつた。居士も一度移轉斷行と決心し、決心した晩は眠らんとしても眠られなかつた位で、借りる家までもきまつてゐた模様であつたが、居士の周圍は殆ど皆この移轉を危んだ。十月四日夜、燕村句集輪講の席上でこの問題を議したところ、鳴雪翁が正面から反對を唱へた。その結果は激論となつて、解決を見なかつたが、その後居士も意を翻し、興津移轉問題は實現に至らなかつた。併し當時の居士を刺激したこ

と、この問題の如きは無く、誰に宛てた手紙を見ても大概興津の事が記されてゐる。

九月八日、漱石氏が英國留學の爲、横濱から出發した。「ホトトギス」の消息に「小生は一昨年大患に逢ひし後は洋行の人を送る毎に最早再會は出來まじくといつも心細く思ひ候ひしに、其人次第々々に歸り來り再會の喜を得たる事も少からず候。併し漱石氏洋行と聞くや否や、迎も今度とは獨り悲しく相成申候」と見えてゐる。熊本から東上した漱石氏は出發に先つて居士の病牀を訪ひ、久々に會談の機を得たのであつた。

漱石氏出發に關する「消息」の出た「ホトトギス」に居士は「水滸傳と八犬傳」及「水滸傳雜詠」を掲げた。「水滸傳と八犬傳」は雜誌にして二十六頁を超えてゐるから、居士としては前後に無い長篇である。「水滸傳」は居士の愛讀書の一であつたらしく、三十年の大患の際にも之を読み、この年も亦読み返してゐる。「八犬傳」との比較に筆を起し、居士自身の文章觀の上から「水滸傳」の文章の妙を説いたのである。この稿を草するに先ち、愚庵和尚に「病中無聊時々水滸を讀む、今や僅々末三四卷を餘すのみに有之候」といふことを申送つたのは、和尚が壯時好んで「水滸傳」を讀み、殆どその文句を誦記してゐたといふやうな事實を知つてゐる爲であらう。

## 最後の寫眞撮影

「ホトトギス」はこの年十月を以て第四卷に達した。居士はこの雑誌に「ホトトギス第四卷第一號のはじめに」といふ一文を掲げ、その感想を述べてゐる。その末段に東京の文學界は長く東京人の占むる所となつてゐることを云ひ、田舎から出て來た者が何年もかゝつて東京風俗を研究し、苦辛して東京化して見たところが、畢竟第二流小説家となるに過ぎず、第一流は依然江戸兒の專有物になつてゐる、文學界に東京閥が尊敬されることが久しいだけ、東京の文學が愈々腐敗して鼻持もならぬやうになつて來ることを論じた一節がある。

兎に角我々の希望は都會の腐敗した空氣を一掃して、田舎の新鮮なる空氣を入れたいのである。東京言葉と衣服の流行が分らない者は小説家の資格が無いだの、戀でなければ文學でないだの、花は莖、蟲は蝶、此外には詩美を持つて居る花も蟲も無いだの、といふやうな、狭い、幼稚な不健全な思想を破つてしまひたい。流行は美でない、喝采は永久でない。我々は

都會人士に媚びて新聞雑誌の上で賞められたくない。我々は斃れて後に已むの決心を以て進むばかりである。併しながら永く都會に住んで居ると自然と腐敗して來る事は世の中に實例が多い。萬一我々が都會の腐敗を一掃する前に軟化して勇氣が挫けたといふやうな事があつたら、其時には第二の田舎者が出て來て必ず我々の志を繼いでくれるであらうといふ事を信ずる。其第二の田舎者といふ奴は今頃何處かの山奥で高い木の上上つて椎の實をゆすぶり落して居るかも知れない。

これは「ホトトギス」の使命を説くと共に、文學に於ける居士の態度を闡明したものである。自己の病漸く篤きを知りながら、山の木の上つて椎の實をゆすぶり落してゐるやうな繼志者を思ひやるあたりは、居士その人に觸れるやうな氣がする。

八月の咯血以前、居士は「ホトトギス」に掲げた「消息」で「小生近日元氣消耗甚しく候につき回復策として百二歳の賀筵にても開かんかと存候。小生百二歳は明治百一年に當り候につき本年に繰上げ候はゞ六十八年前取りする譯に相成候。賀筵はまだ早過ぎると申す人も有之候へども小生は時期既におくれたりと存候。それにつき何か善き趣向もがなと考居候」と云つたことがある。百二歳賀筵の名は用ゐられなかつたが、この年の誕生日（舊曆九月十七日）には碧梧桐、虚

子、四方太、鼠骨の諸氏を招き、赤、青、黄、白、茶といふやうな題を課して、各々その色の食物か玩具を持寄る趣向とした。翌年の「仰臥漫録」にこの日の事を回顧して「余ハ此日ヲ非常ニ自分ニ取ツテ大切ナ日ト思フタノデ先ツ庭ノ松ノ木カラ松ノ木ヘ白木綿ヲ張りナドシタ。コレハ前ノ小菊ノ色ヲウシロ側ノ雞頭ノ色ガ壓スルカラ此白幕ヲ雞頭ヲ隠シタフデアル。トコロガ暫クスルト曇リガ少シ取レテ日ガ赫トサシタノデ、右ノ白幕ヘ五六本ノ雞頭ノ影ガ高低ニ映ツタノハ實ニ妙デアツタ」と書いてある。この會は非常に愉快であつたらしい。

十一月以降、子規庵に於ける和歌、俳句の例會は皆廢することになつた。成るべく靜養を旨としたる上にて病氣に多少の間あらば日本とホトトギスとの上に力を盡すべく、此新聞此雜誌に小生の名現れ候間は六疊の病室に籠りてガラス越の日光を浴びつゝ、猶ながらへ居候ものと御推察被下度候」などといふ「消息」を讀むと、居士の身邊が俄に寂しくなつたやうに思はれるが、事實は必ずしもさうではない。日光へ紅葉を見に行つた歌の仲間が、夜に入つて二度まで居士を驚かしたやうなこともあり、新嘗祭には雞頭鬮汁會なるものが歌の方だけで催されてもゐる。諸會廢するの後も蕪村句集論議だけは隔月に子規庵で催すことになつてゐたし、少人數の山會（文章會）などは時に枕頭で開かれた。この年から病牀に煖爐を焚くことになつたので、十一月三十日には

煖爐据付祝などといふこともあつた。

蕪村忌も例年通り催されたが、運座を廢することにした。寫眞撮影の際三十八人とあるから、前年より稍々少い勘定である。但風が強かつた爲、居士は寫眞に加はることが出來ず、翌日單獨に撮影した。現在最も廣く行はれてゐる横向の寫眞がそれで、居士最後の寫眞となつたわけである。

「寒玉集」及「寸紅集」が出版されたことも、この年掉尾の出來事に數へなければならぬ。從來單行本になつたものは、いづれも俳句方面のものに限られた。文章方面の收獲は之を以て嚆矢とする。「寒玉集」の巻頭には「日本」に出た「敘事文」一篇が載せられた。

## 明治三十四年

## 昨年今年明年

明治三十四年（三十五歳）には、前年の「新年雑記」にあるやうな軽快な事柄は見當らない。

うつせみの我足痛みつごもりをうまいは寐ずて年明にけり

といふやうな状態で新年を迎へたのである。居士の枕頭には巻紙状袋などを入れる箱があり、その上に置いた寒暖計に小さい輪飾が括りつけてあつた。

枕への寒さ計りに新玉の年ほぎ繩をかけてほぐかも

といふ歌はこれを詠んだのである。

この年「日本」にはじめて掲げたのは「書中の新年」及「御題の短歌を新年の紙上に載する」とに就きて」の二篇であつた。「書中の新年」といふのは「家人に命じて手に觸るゝ所の書籍何にても持ち來らしめ、漸次に之を閲して其中より新年に關する字句を抜抄」するといふ趣向のもので、その冒頭には次のやうに記されてゐる。

一 年 明 年 今 年 昨 一

明治卅四年は來りぬ。去年は明治卅三年なりき。明年は明治卅五年ならん。去年は病牀に在りて屠蘇を飲み、雑煮を祝ひ、蜜柑を喰ひ、而して新年の原稿を草せり。今年も亦病牀に在りて屠蘇を飲み、雑煮を祝ひ、蜜柑を喰ひ、而して新年の原稿を草せんとす。知らず、明年は猶病牀に在り得るや否や。屠蘇を飲み得るや否や。雑煮を祝ひ得るや否や。蜜柑を喰ひ得るや否や。而して新年の原稿を草し得るや否や。發熱を犯して筆を執り、病苦に堪へて原稿を草す。人は將に余の自ら好んで苦むを笑はんとす。余は切に此苦の永く續かん事を望むなり。明年一月余は猶此苦を受け得るや否やを知らず、今年今月今日依然筆を執りて復諸君に紙上に見ゆる事を得るは實に幸なり。昨年一月一日の余は豈能く今日あるを期せんや。

「新年雑記」に記されたところと大體似てゐるけれども、前年に比べるとどこか迫つた點があ



る。一年間に著しく進んだ病苦が自ら然らしむるのであらう。

一年前にはじめて「新年雜詠」の短歌を募集し、「日本」に掲げた居士は、今年は旋頭歌を募つてその結果を新年の紙上に発表した。選に入つた者は僅に七人、各一首づつに過ぎなかつた。これは居士の病苦が多くの歌を選むの勞に堪へなくなつたのではない。居士の歌に臨む標準が次第に高く、一年前とは全く程度を異にする爲である。この傾向は已に歌會を廢する少し前あたりからの評語にも見えてゐるが、旋頭歌の選に至つて更に顯著になつた。舊來の情性によつて歌を作る者は、勢ひ振落されざるを得ぬ。一面から云へばこの傾向は、居士の歌の世界を前より狭くしたやうに見えたかも知れない。居士の選歌の標準が高まつたといふことも、外間からは容易に窺ひ得ぬものであるだけに、之に従つて進む者は固より不退轉の勇氣を必要とする。居士の晩年になればなるほど、その選に入る顔觸が少數者に限られた觀があつたのは、全くこの爲に外ならぬのであつた。

一月の「ホトトギス」には「初夢」及「蕪村寺再建緣起」が出てゐる。「初夢」は睡中に見た夢といふよりも、寧ろ居士が胸裏に描いた夢の方であらう。新年と共に病から脱却して方々年賀に歩いたり、汽車に乗つて歸郷したりする、此等の夢は居士に取つては實現すべからざるものにな

つてしまつた。富士山を下りながら砂を踏みすべらして眞逆様に落ちたと思へば、腰の痛み、背の痛み、足の痛み、身動きもならぬ現實に還らざるを得ない。輕快な「初夢」の文章が讀む者に云ふべからざる悲哀を感じしむるのはこの爲であらう。

「蕪村寺再建緣起」は黄表紙に擬したもので、不折氏が挿畫を畫いてゐる。かういふ趣向を新聞雜誌の上に凝すことは、居士得意のところであつたが、病苦はその餘力をかういふ方面に用ゐることを困難ならしめた。「蕪村寺再建緣起」は最後の趣向と見るべきものである。

## 「墨汁一滴」

「墨汁一滴」が「日本」に出はじめたのは一月十六日からである。居士がこれを草することを思立つて、二回ほど文章を送つたところ、一向新聞に出ない。この事は大に居士を失望せしめた。そこで鼠骨氏に書を送つて、場所は擇ばぬ、欄外でも差支無い、欄外を借りて欄外文學なども洒落れてゐるが、欄外二欄貸さないだらうか、と云つた。毎日書くつもりではじめた「墨汁一滴」

が載らないやうでは新聞も讀みたくない、病中は樂が少いから、一の失望に逢つた時慰めやうが無い、といふのである。この書簡が十五日附のもので、その翌日から「墨汁一滴」は紙上に現れたのであつた。

「墨汁一滴」は最初から一行以上二十行以下といふことを大體の限度としてゐた。その日／＼思ひついたことを記して行く點は「松蘿玉液」などに似てゐるけれども、文の短いに反して含蓄は甚だ多い。「松蘿玉液」以後に於ける五年間が、單に居士の病苦をのみ募らしめたものでないことは、どの箇所を開いて見ても明な事實である。

人の希望は初め漠然として大きく後漸く小さく確實になるならひなり。我病牀に於ける希望は初めより極めて小さく、遠く歩行き得ずともよし、庭の内だに歩行き得ばと云ひしは四五年前の事なり。其後一二年を経て、歩行き得ずとも立つ事を得ば嬉しからん、と思ひしに餘りに小さき望かなと人にも言ひて笑ひしが一昨年夏よりは、立つ事は望まず、坐るばかりは病の神も許されたきものぞ、などかこつ程になりぬ。しかも希望の縮小は猶こゝに止まらず、坐る事はともあれ、せめては一時間なりとも苦痛無く安らかに臥し得ば如何に嬉しからんとはきのふ今日の我希望なり。小さき望かな。最早我望もこの上は小さくなり得ぬ程の

極度にまで達したり。此次の時期は希望の零となる時期なり。希望の零となる時期、釋迦は之を涅槃といひ耶蘇は之を救ひとやいふらん。

かういふ世界は「松蘿玉液」時代の居士の想像を許さぬところであつた。「墨汁一滴」の人に與へる感銘が「松蘿玉液」の比でないのは固より當然と云はなければならぬ。

居士は「日本」紙上に於けるあらゆる執筆を廢し、「墨汁一滴」に一切を集中しようとした。歌に關する問題も俳句に關する問題も、やはり「墨汁一滴」で埒を明けようとした。格堂氏から預つたまゝになつてゐた平賀元義の歌を天下に紹介したのも「墨汁一滴」に於てであつた。居士は世に知られず、不遇の裏に一生を了つた元義の歌が醇乎たる萬葉調なるを見て「一たびは驚き一たびは怪し」んだが、廣くその歌を知らしめんとしてこの筆を執つたのである。「萬葉以後に於て歌人四人を得たり。源實朝、徳川宗武、井手曙覽、平賀元義是れなり」と云ひ、「四家の歌を見るに、實朝と宗武とは氣高くして時に獨創の處ある相似たり。但宗武の方、霸氣稍々強きが如し。曙覽は見識の進歩的なる所、元義の保守的なるに勝れりとせんか、但伎倆の點に於て調子を解する點に於て曙覽は遂に元義に如かず。故に曙覽の歌の調子と、のはぬが多きに反して元義の歌は殆ど皆調子と、のひたり。されど元義の歌は其取る所の趣向材料の範圍餘りに狭きに過ぎて従つ

て變化に乏しきは彼の大歌人たる能はざる所以なり。彼にして若し自ら大歌人たらんとする野心あらんか、其歌の發達は固より此に止まらざりしや必せり。其歌の時に常則を脱する者あるは彼に發達し得べき材能の潛伏しありし事を證して餘りあり。惜しいかな」と云ふ。居士の結論は常に斷々乎としてゐる。平賀元義は居士によつて顯揚せられた最後の歌人であつた。「墨汁一滴」十回を費した元義の事は、直に「心の華」に轉載せられた。

歌に關する文章は必ずしも元義の事にとゞまらぬ。有名な「鐵幹是ならば子規非なり、子規是ならば鐵幹非なり、鐵幹と子規とは竝稱すべき者にあらず」といふ言葉もこの中にあり、短歌會の諸子に對する警策も亦この中にある。或時の短歌會で、最もいゝ歌は誰にも解せらるべき者だといふ主張と、いゝ歌になるほど之を解する人が少くなるといふ主張とが對立したことがあつた。居士は之を聞いて、「愚かなる人々の議論かな。文學上の空論は又しても無用の事なるべし。何とて實地に就きて論ぜざるぞ。先づ最も善きといふ實地の歌を擧げよ。其歌の選擇恐らくは兩者一致せざるべきなり。歌の選擇既に異にして枝葉の論を爲したりとて何の用にか立つべき。蛙は赤きものか青きものかを論ずる前に先づ蛙とはどんな動物をいふかを定むるが議論の順序なり。田の蛙も木の蛙も共に蛙の部に屬すべきものならば赤き蛙も青き蛙も兩方共にあるべし。或は解し

易きにも善き歌あり、解し難きにも善き歌ありと思ふは如何に」と「墨汁一滴」に書いた。かういふ問題に對する居士の所論は、坦々たる中道を行くの概があつた。

落合直文氏の歌に對し、精細なる批評を試みたのも「墨汁一滴」に於てであつた。居士は毎日一首、多くても二首位の割合で、一々之を解析して微に入り細を穿つ評語を加へた。かういふ精細な歌評は、居士以前に誰も企てぬものであつたらうと思はれる。

又

歌

又

歌

一 歌

五月十三日、左千夫氏に與へた居士の書簡に「藤の歌山吹のうた歌又歌歌よみ人に我なりにけり」といふ歌がある。前年末に作つた「雪」の旋頭歌を新年の「日本」に掲げて以來、居士は殆どその歌を示さなかつたが、四月二十八日に至つて

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゞみの上にとゞかさりけり

の歌にはじまる藤の十首が先づ「墨汁一滴」に現れた。これに端を發して、山吹の歌、岩手の孝

子の歌、かしは餅の歌、ほととぎすの歌といふ風に、十首づつの短歌が引つゞき發表されたが、五月四日の「しひて筆を執りて」といふ一連の歌がその中の絶唱であらう。

佐保神の別れかなしも來ん春にふたゝび逢はんわれならなくに  
 いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春行かんとす  
 病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも  
 世の中は常なきものと我愛づる山吹の花散りにけるかも  
 別れ行く春のかたみと藤波の花の長ふさ繪にかけるかも  
 夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちがてぬ我いのちかも  
 くれなるの薔薇ふゝみぬ我病いやまさるべき時のしるしに  
 薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽摘みし昔おもほゆ  
 若松の芽だちの縁長き目を夕かたまけて熱いでにけり  
 いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

居士はこの歌の終に「心弱くところ人の見るらめ」の一語を加へてゐる。暮春の情と、病牀の居士と、庭の風物とが渾然として一つのものになつてゐること、この一連の如きは少い。藤の歌

の中にも「藤なみの花をし見れば紫の繪の具取り出で寫さんと思ふ」藤なみの花の紫繪にかゝばこき紫にかくべかりけり」とあり、こゝにも亦「藤波の花の長ふさ繪にかけるかも」とあるが、この藤を畫いて歌を題したものが今でも遺つてゐる。紅の薔薇のふゝむにつけても、五月といふ厄月の到ることを思ひ、夕顔の棚を作らうとしながらも、秋まで持つべき命であるかといふことを念頭に浮べる。而も居士は秋の草花の種を庭に蒔かしめ、命あらばそれを見ようとしてゐるのである。この一連の歌を誦して、居士の心持を直に身に感ぜぬといふならば、その人は畢に詩を談ずるに足る人ではない。

五月九日の「墨汁一滴」にはかういふことが書いてある。

今になりて思ひ得たる事あり、これ迄余が横臥せるに拘らず割合に多くの食物を消化し得たるは咀嚼の力與つて多きに居りし事を。嚼みたるが上にも嚼み、和らげたるが上にも和らげ、粥の米さへ嚼み得らるゝだけは嚼みしが如き、あながち偶然の癖にはあらざりき。斯く嚼み嚼みたるためにや、咀嚼に最必要なる第一の臼齒左右共にやう／＼に傷はれて此頃は痛み強く少しにても上下の齒をあはす事出来難くなりぬ。かくなりては極めて柔かなるものも嚼みずらに呑み込まざるべからず。嚼みずらに呑み込めば美味を感ぜざるのみならず、腸胃直に痛み

て痙攣を起す。是に於て衛生上の營養と快心的の娛樂と一時に奪ひ去られ、衰弱頓に加はり晝夜悶々、忽ち例の問題は起る「人間は何が故に生きて居らざるべからざるか」

次の長短歌はこの文章の末に記されたものである。

さへづるやから白なす、奥の齒は蟲ばみけらし、はたつ物魚をもくは  
えす、木の實をば噛みても痛む、武藏野の甘菜辛菜を、粥汁にませて  
も煮ねば、いや日けに我つく息の、ほそり行くかも

下總の結城の里ゆ送り來し春の鶉をくはん齒もがも

菅の根の永き一日を飯もくはず知る人も來すくらしかねつも

居士の唯一の療養法は「うまい物を食ふ」に在つた。この「うまい物」は多年の經驗と一時の情況とによつて定るので、他人の容喙を許さぬ底のものであつたが、この療養法によつて居士は垂死の病軀に一脈の活氣を注入し、力を文學の上に伸し得たのである。嘗て「ホトトギス」の「消息」に於て、一流の御馳走論を述べたこともあつた。その御馳走を攝るべき第一關門たる齒が傷はれたのでは、居士の病牀生活は暗澹たらざるを得ない。「人間は何が故に生きて居らざるべからざるか」といふ歎聲も、決して誇張の言ではないのである。

## 「仰臥漫録」

「墨汁一滴」から會心の條を摘記して行くとなれば、まだく容易に盡くべくもないが、三十四年には他に記さなければならぬものを控へてゐるので、遺憾ながら割愛して先へ進まうと思ふ。「墨汁一滴」の稿は七月二日まで続いた。終らんとするに先つて不折氏洋行の事があり、數日を費して送別の辭を述べた。「小日本」の條に記した不折氏との最初の會見の事なども、この文中に在る。

「墨汁一滴」連載中は、前年のやうな氣力は無いにしても、執筆を妨げるほどの容體も無かつたらしく、厄月の五月も又どうやら通過した。「ホトトギス」にも「死後」「吾寒園の首に書す」病牀俳話「くだもの」等、比較的多くの文章を發表してゐる。「くだもの」に關する記憶を敘した一篇は、枯淡の裏に精彩があり、過去の事實を語つてゐるに拘らず、現在その境に在るの思あらしむるものであつた。俳句の選も中途共選となり、共選も困難になつて他の選句の上に「規」の

一字を記すのみと變つたが、その後は長く選から遠ざからざるを得なかつた。但鳴雪翁の許に催される蕪村句集論講だけは、あとから筆記を閲して自己の意見を書加へてゐたやうである。

四月中「寒玉集」の第二編が出版され、五月には「春夏秋冬」の春の部が出た。「春夏秋冬」は「新俳句」に次ぐ俳句の選集で、居士は病をつとめて春の部だけの選抜を了へ、序及凡例も自ら草した。この序及凡例は「春夏秋冬」の巻首に掲げられるに先つて「墨汁一滴」に掲げられた。この時分の居士は寝返りすることも困難になつてゐた。疊に二三箇所麻で箆の鏝の如きものを拵へ、これにつかまつて寝返りを扶けようといふ方法を講じたことが、五月十日の事を記した「墨汁一滴」に在る。苦痛は想像の外である。

八月二十六日、子規庵に俳談會なるものが催された。突然の催であつたが、それでも二十人ばかり集つた。前年末の蕪村忌以來、絶えて無かつた會合だけに、はじめて居士を見るといふだけで満足した人もあつたらしい。席上居士は庭前の絲瓜及夕顔の句を五句ほど作り、之を追加の話題にした。

「仰臥漫録」の筆を執りはじめたのは九月に入つてからである。「仰臥漫録」は居士の日記であるが、單純な日記ではない。三度の食事や間食に至るまで、日々の食物が克明に記されてゐるか

思ふと、突として何かの感想が出て來る。畫があり、歌があり、句がある。居士の日記として現在傳はつてゐるのは、前にもちよつと記したやうに、二十五年、六年と三十年の一部に過ぎぬが、「仰臥漫録」の内容は従前の日記の如きものではない。人間の手に成つたこの種の記録として、「仰臥漫録」ほど眞實味に富んだ、而も興趣の多いものは他に類例が少いのではあるまいかと思ふ。

絲瓜ノ花一ツ落ツ ○茶色ノ小キ蝶低キ雞頭ニトマル ○曇ル ○追込籠ノジャガタラ雀イ  
ツノ間ニカ籠ヲスケテ絲瓜棚松ノ枝ナド飛ビメグルヲ見ツケル ○鄰家ノ手風琴聞ユ ○ジ  
ヤガタラ雀鄰ノ庭ノ木ニ逃ゲル、家人籠ノ鐵網ヲ修理ス ○蟬ツク、、ボーシノ聲暑シ ○  
日照ル ○蜻蛉一ツニツ ○揚羽、山女郎或ハ去リ或ハ來ル ○梨ヲクフ

といふやうな平穩な觀察もある。

今年ノ夏馬鹿ニ熱クテタマラズ、人ノ旅行記ヲ見ルトキ吾モチヨイト旅行シテ見ヨウト思フ  
氣ニナル、ソレモ場合ニヨルガ谷川ノ岩ニ激スルヤウナ涼シイ處ノ岸ニ小亭ガアツテソコデ  
浴衣一枚ニナツテ一杯ヤリタイト思フタ

二六ニアル樂天ノ紀行ヲ見ルト毎日西瓜ヲ食フテ居ル、羨マシイノ何ノテ、  
大阪デハ鰻ノ井ヲ「マムシ」トイフ由聞クモイヤナ名ナリ、僕ガ大阪市長ニナツタラ先ヅ一

番ニ布令ヲ出シテ「マムシ」トイフ言葉ヲ禁ジテシマフ  
といふやうな超然たる感想もある。

さうかと思ふと又、自分の喰べる梅干の核から出發して

貴人ノ膳ナドニハ必ズ無數ノ殘物ガアツテアタラ掃溜ニ捨テラル、ニ違ヒナイ、肴ノ骨ニハ  
肉ガ澤山ツイテキルデアラウ、味噌汁トカ吸物トカイフモノモ皆迄ハ吸ヒ盡シテナイデアラ  
ウ、斯ウイフ者コソ眞ニ天物ヲ暴何トカスル者ト謂フベシダ、之ヲ彼孤兒院トカ養育院トカ  
ニ寄附シテ喰ハスヤウニシタラ善イダラウ、自分ノ内デモ牛乳ヲ捨テルコトガ度々アルノデ、  
イツデモ之ヲ乳ノナイ孤兒ニ吞マセタラト思フケレド仕方ガナイ、何カ斯ウイフ處へ連絡ヲ  
ツケテ過ヲ以テ不足ヲ補フヤウニシタイモノダ

兵營ヤ學校ノ殘飯ハ貧民ノ生命デアルトイフカラ家々ノ殘飯モ集メテ廻ルワケニ行カナイダ  
ラウカ、サウ思フト犬ヤ猫ヲ飼フテ牛肉ヤ鰹節ヲヤルナドハ出來タコトデナイ、小鳥ニ粟ヲ  
ヤルサへ無益ナ感じガスル

といふ風に、對社會的な意見となつて現れることもある。病牀に釘付にされて寢返りも自由に出  
來ず、日夜呻吟してゐる人の書くものとは思はれない。

病苦の問題にしてもさうである。居士は病の爲に苦しむことは苦しんでも、病の爲に役せられ  
てはゐない。「をかしければ笑ふ。悲しければ泣く。併し痛の烈しい時には仕様がなから、うめ  
くか、叫ぶか、泣くか、又は黙つてこらへて居るかする。其中で黙つてこらへて居るのが一番苦  
しい。盛んにうめき、盛んに叫び、盛んに泣くと少しく痛が減する」と「墨汁一滴」にある通り、  
強ひて平氣を装つたりはしないが、病に住しながら時に病を離れるところがある。

コンナニ呼吸ノ苦シイノガ寒氣ノタメトスレバ此冬ヲ越スコトハ甚ダ覺東ナイ、ソレハ致シ  
方モナイコトダカラ運命ハ運命トシテ置イテ醫者ガ期限ヲ明言シテクレ、バ善イ、モウ三ケ  
月ノ運命ダトカ半年ハムツカシイダラウトカ言フテモラヒタイ者ヂヤ、ソレガキマルト病人  
ハ我儘ヤ贅澤ガ言ハレテ大ニ樂ニナルデアラウト思フ、死ヌル迄ニモウ一度本膳デ御馳走ガ  
食フテ見タイナドト云フテ見タトコロデ今デハ誰モ取りアハナイカラ困ツテシマフ、若シコ  
レデモウ半年ノ命トイフコトニデモナツタラ足ノダルイトキハ十分按摩シテモラフテ食ヒタ  
イトキニハ本膳デモ何デモ望ミ通りニ食ハセテモラフテ看病人ノ手モフヤシテ一舉一動悉ク  
傍ヨリ扶ケテモラフテ西洋菓子持テ來イトイトイフトマダ其言葉ノ反響ガ消エヌ内西洋菓子ガ山  
ノヤウニ目ノ前ニ出ル、カン詰持テ來イトイトイフト言下ニカン詰ノ山ガ出來ル、何デモ彼デモ

言フ程ノ者ガ壘ノ縁カラ湧イテ出ルトイフヤウニシテモラフ事ガ出来ルカモ知レナイといふ「仰臥漫録」の一節だけ見ても、居士の心境が如何なるものであつたかを知り得るであらう。かう書いた居士がこの年の誕生日に當つて岡野の料理を取寄せ、平生看護の勞に酬いんが爲、特に家内三人で之を食ひ、「蓋シ亦余ノ誕生日ノ祝ヒヲサメナルベシ」として會席膳の獻立を記してゐるのを読むと、吾々も涙無きを得ない。

## 古 白 日 來

十一月六日の夜、居士はロンドンの漱石氏宛に一書をしたゝめた。「僕ハモーダメニナツテシマツタ、毎日譯モナク號泣シテ居ルヤウナ次第ダ、ソレダカラ新聞雜誌ヘモ少シモ書カヌ。手紙ハ一切廢止。ソレダカラ御無沙汰シテスマヌ。今夜ハフト思ヒツイテ特別ニ手帑ヲカク」といふ書出して、この頃としては稍々長い文句をつらねた末、次のやうに記されてゐる。

鍊卿死ニ非風死ニ皆僕ヨリ先ニ死ンデシマツタ。

僕ハ迎モ君ニ再會スルコトハ出来ヌト思フ。萬一出来タトシテモ其時ハ話モ出来ナクナツテルデアロー。實ハ僕ハ生キテキルノガ苦シイノダ。僕ノ日記ニハ「古白日来」ノ四字ガ特書シテアル處ガアル。

漱石氏がロンドンに於ける動靜その他をこま／＼と報じて來た長文の手紙は、ひどく居士を喜ばした。「倫敦消息」と題して二度「ホトトギス」に掲げた上、更に「若シ書ケルナラ僕ノ目ノ明イテル内ニ今一便ヨコシテクレヌカ」と申送つたのがこの手紙なのである。「僕ノ日記」といふのは「仰臥漫録」のことで、「古白日来」と特記したのは十月十三日の條であつた。朝來恐しく降つた雨がやんで、天氣が直りかけた午後二時頃から、居士は俄に氣持が變になつて、「タマラン／＼ドウシヨウ／＼」と連呼する。遂に四方太氏宛に「キテクレネギシ」と電信を打つこととし、母堂が頼信紙を持つて車屋まで行かれる。令妹は風呂へ行つて不在である。たつた一人家の中に残された居士は、硯箱の中にある二寸許の小刀と千枚通しとを見つめながら、頻に自殺することを考へる。但この錐と小刀では死ねさうもない。次の間へ行けば剃刀があるので、それさへあればわけ無く死ぬるのだけれども、そこまで匍つて行くことも出来ない。已むなくんば小刀か錐を用ゐるのだが、何分恐しさが先に立つ。死は恐しくないが苦が恐しい。病苦でさへ堪へきれぬ上に、



死損つて苦しんでは堪らない。小刀を手に取らうか取るまいかといふ二つが、心の中で戦つてゐるうちに、母堂はもう歸つて來られた……。

居士はこの心理経過を詳細に記し、

逆上スルカラ目ガアケラレヌ、目ガアケラレヌカラ新聞ガ讀メヌ、新聞ガ讀メヌカラ只考ヘル、只考ヘルカラ死ノ近キヲ知ル、死ノ近キヲ知ルカラソレ迄ニ樂ミヲシテ見タクナル、樂ミヲシテ見タクナルカラ突飛ナ御馳走モ食フテ見タクナル、突飛ナ御馳走モ食フテ見タクナルカラ雜用ガホシクナル、雜用ガホシクナルカラ書物デモ賣ラウカトイフコトニナル………  
……イヤ、書物ハ賣リタクナイ、サウナルト困ル、困ルトイヨ、逆上スル

といふ風に唇々と書いて來て、最後に小刀と千枚通しの形を畫き、上に「古白曰來」の四字を記したのである。黄泉に歸した知友が幾人もある中に、特に古白の名を擧げた理由は説明するまでもあるまい。

「仰臥漫録」の中には又次のやうな箇所がある。

天下の人餘り氣長く優長に構へ居候はゞ後悔可致候

天下の人あまり氣短く取いそぎ候はゞ大事出來申間敷候

吾等も餘り取いそぎ候ため病氣にもなり不具にもなり思ふ事の百分一も出來不申候  
併し吾等の目よりは大方の人はあまりに氣長くと相見え申候  
貧乏村の小學校の先生とならんか日本中のはげ山に樹を植ゑんかと存候

會計當而已矣牛羊茁壯長而已矣此心持にて居らば成らぬと申事はあるまじく候、吾等も死に近き候今日に至りやうく悟りかけ申候やう覺え候、瘦我慢の氣なしに門番關守夜廻りにても相つとめ可申候と存候、只時々御慈悲には主人の殘肴きたなきはかまはず肉多くうまさうな處をたまはりたく候、食氣ばかりはどこ迄も増長可致候

兆民居士の一年有半といふ書物世に出候よし新聞の評にて材料も大方分り申候、居士は咽喉に穴一ツあき候由、吾等は腹背中髀ともいはず蜂の巢の如く穴あき申候、一年有半の期限も大概は似より候こと、存候、乍併居士はまだ美といふ事少しも分らず、それだけ吾等に劣り可申候、理が分ればあきらめつきつき可申、美が分れば樂み出來可申候、杏を買ふて來て細君と共に食ふは樂みに相違なけれどもどこかに一點の理がひそみ居候、焼くが如き晝の暑さ去りて夕顔の花の白きに夕風そよぐ處何の理窟か候べき

左の一節も亦右と同じく、十月十五日に書かれたものらしい。

吾等なくなり候とも葬式の廣告など無用に候、家も町も狭き故二三十人もつめかけ候は、  
 柩の動きもとれまじく候

何派の葬式をなすとも柩の前にて弔辭傳記の類讀み上候事無用に候

戒名といふもの用の候事無用に候、曾て古人の年表など作り候時狭き紙面にいろく書き並  
 べ候にあたり戒名といふもの長たらしめて書込に困り申候、戒名などは無くもがなと存候

自然石の石碑はいやな事に候

柩の前にて通夜すること無用に候、通夜するとも代りあひて可致候

柩の前にて空涙は無用に候、談笑平生の如くあるべく候

晩年の居士の心持は大體こゝに盡きてゐるかと思ふ。瘦我慢の氣なしに門番關守夜廻りでもつ  
 とめる、といふところまで脱落して、病に苦しむ一面極めて平かな心を維持し得た。變態奇矯に  
 陥り勝な病人心理と同日の談ではない。貧乏村の小學校の先生とならんか、日本中のはげ山に樹  
 を植ゑんか」といふことは、十月十九日に至り「今日余若シ健康ナラバ何事ヲ爲シツ、アルベキ  
 カ」といふ問題となつて再び出て来る。「幼稚園ノ先生モヤツテ見クシト思ヘド財産少シナクテハ  
 余ニハ出來ズ、造林ノ事ナドモ面白カルベキモ其方ノ學問セザリシ故今更山林ノ技師トシテ雇ハ

ル、ノ資格ナシ、自ラ山ヲ持ツテ造林セバ更ニ妙ナレド買山ノ錢無キヲ奈何」といふのである。  
 明日を測られぬ病軀を抱いた居士の眼が、寧ろ遠い世界を望んでゐたことは、この一事からも想  
 像することが出来る。

居士が身後の事に就て記したものは、この數箇條の外に見當らない。「死後」といふ文章の中に  
 書いたところは、まだ多少の文學的空想が加味されてゐた。こゝに云ふところは皆端的である。  
 此等の言は必ずしも遺書と見るべきではないが、この條々は全體歿後に於ても居士の意志を尊重  
 されたやうに思はれる。

## 馬鹿野郎糞野郎

「仰臥漫録」は十月二十九日に至つて一先づ絶え、三十五年三月に三日ほど記事があるだけで、  
 六月以降は麻痺劑服用日記といふことになつてゐる。即ち三十四年九月初より十月末までを以て  
 主要なる部分と見るべく、これまで世間に發表された「墨汁一滴」の類に比し、更に瑕瑜掩はさ

る居士の眞面目が現れてゐるのは、これが日記であり私記であつた爲で、「仰臥漫録」の貴重なる所以は第一にこの點に在ると云つて差支無い。

「仰臥漫録」の初の方には畫が多く、俳句も相當記されてゐる。畫は固より病牀に見得る範圍の寫生であるが、句も亦即事即景を直叙して、淡々たる中に自在の趣を得たものが少くない。

秋一室拂子ノ髻ノ動キケリ

病間アリ秋ノ小庭ノ記ヲ作ル

病牀ノウメキニ和シテ秋ノ蟬

朝顔ヤ繪ノ具ニジンデ繪ヲ成サズ

秋風ヤ絲瓜ノ花ヲ吹キ落ス

欲睡

秋ノ蠅叩キ殺セト命ジケリ

臥シテ見ル秋海棠ノ木末カナ

西へマハル秋ノ日影ヤ絲瓜棚

筆モ墨モ洩瓶モ内ニ秋ノ蚊帳

驚クヤ夕顔落チシ夜半ノ音

人は容易に心の虚飾を去り得るものではない。豊富な天分の所有者が往々にして岐路に迷ひ、愚者の一道を守るに如かぬ點があるのはこの爲である。「仰臥漫録」の句の及びがたいのは、すべてが朗然として一塵をとめぬ居士の心胸の産物だからであらう。文字や技巧の上からのみ眺めて、平凡と評し去る者があるならば、それは此等の句の裏に藏する醍醐味を味ひ得ぬ爲に外ならぬのである。

十一月二十日になつて居士は「命のあまり」といふものを「日本」に掲げた。「墨汁一滴」の筆を擱いて以來、はじめての文章である。當時世間の大評判であつた「一年有半」を評して平凡淺薄と云ひ、餘命一年半の宣告を受けながら、尙この書を書き、苟も命ある間は天職を盡してゐるのは感すべきだといふやうな世評に對し、これは見當違ひの褒辭で、病中筆を執つてもものを書くのは一種のうさ晴しに過ぎぬ、天職を盡したのでも何でもないと云つたりした爲、一部讀者の反感を買つたらしく、「日本」紙上にもさういふ意味の投書が何度か現れた。居士の「一年有半」に對する感想は大體「仰臥漫録」に書いたところに盡きて居り、「命のあまり」はその意味を更に敷衍しようとしたものではないかと思はれるが、當時居士の容體は甚だ悪く、「仰臥漫録」の筆さへ

執り得ぬ状態であつたから、遂に意の如く進行しなかつた。たゞ居士は前後三回で筆を投ずるに當り、投書に對しても次のやうに一矢酬いてゐる。

それから又「墨汁一滴」を読んで同情を表したが、「命のあまり」を読んであいそをつかしたといふやうな事が書いてあつたと思ふ。余が病氣であるについて同情を表せられる見ず知らずの人が澤山あつて、余は屢々之が爲に感泣するのである。併しながら「墨汁一滴」を誤解して同情を表せられるやうなのは甚だ迷惑に感ずる。斯様な同情は早く撤回せられたいものである。

又或人は「一年有半」の成功を余が羨んだとか妬んだとか言ふて居る。さう見られるならば方がない。要するに是等の誤解は余の文章の悪いといふよりも、寧ろ其人が余自身を誤解して居るのであらう。

誤解した同情は撤回して貰ひたいといふあたり、特に居士の面目躍如たるものがある。

居士が「碧巖集」を読んで興味を感じたのは、三十四年後半の事ではないかと思はれる。この年の蕪村忌は子規庵で催すことが出来ないので、道灌山胞衣神社に會場を持つて行つた。その時の寫眞を居士の許に齎したら、居士は直に筆を執つて裏面に次のやうな文句をしたゝめた。

菩薩子喫飯來

オ前方腹ガヘツテ一句モ吐ケヌヂヤナイヨ

不堪奪飢人之食盈偏空腹

コ、ニ天王寺蕪ノ漬物ガアル、コレデモ食ヒ給ヘ

翻吾澁瓶瀧偏頭上

咄

道へ奈良茶三石ハ蕪ノ漬物ニイヅレゾ

道ヒ得ズンバ三十棒

道ヒ得テモ三十棒

次のも同じ場合のものである。

お前ひとりか連衆は無いか連衆あとから汽車で來る

好箇同伴待チ合セテ共ニ行ケ、謹ンデ懷中ヲスリ取ラル、莫レ、芭蕉蕪村是レ掬摸ノ親玉

この種の文字は咄嗟の間に成るので、もと／＼何かに發表する爲に書くのでないから、どの位あるものかよくわからない。香取秀眞氏藏の左の一篇なども、目次は無いけれども、或は同じ頃

の作ではないかと想像される。

題睡猫圖

金猫兒 飽膏梁

群鼠如盜任跳梁

水仙花下睡方熟

總不管

滿洲風雲太匆忙

米相場

株相場

咄

新橋別有相識子

任他妻奴嚙糟糠

飄亭氏が三十五年の年頭に居士を訪ねたら、この頃は頻に偽を稽古してゐるが、なか／＼うまくなつた。何でも知つてゐるやつを片端から引導渡してやらうと思ふ、この間花和尚魯智深にや

つたのがかうだと云つて、

馬鹿野郎糞野郎。一棒打盡金剛王。再過五臺山下道。野草花開風自涼。

を示したさうである。これも亦三十四年末に成つたものに相違無い。

# 明治三十五年

## 「瀨祭書屋俳句帖抄」

明治三十五年（三十六歳）は来た。この一月二日に唐紙を展べて福壽草を畫き、それに添へた文句にもやはり偈の氣味があるから、全文を引用して置く。

明治卅五年一月二日朝

コ、アを持て來い 無風起波

コ、ア一杯飲む 小人閑居不善ヲナス

菓子はないかな 佛ヲ罵ツテ已マズ又祖ヲ呵セノトス

もなかではいかなかナ

いかん鹽煎餅はないかな

ない 趙州無字

ン—— 打タレズンバ仕合セ也

左千夫來ル 喘牛乳屋

御めでたうございます

同 健兒病兒同一筆法

空也せんべいを持て來ました 好魚惡餌ニ上ル

丁度よいところで 釣巨鱈也不妨

空也煎餅をくふ 明イタロニホタ餅

..... 空ハ薄曇リニ曇ル何事ヲカ生ジ來ラントス

.....

コ、アを持て来い……蜜柑を持て来い 蜜柑ヲ剥ク一段落  
 シー——ン——  
何等ノ平和ゾシカモ大風来ラントシテ天地静マリカヘル今  
 五分時ニシテ猛虎一嘯暗雲地ヲ捲テ来ラニアナオソロシ

年頭は比較的無事であつたらしく、

薬のむあとの蜜柑や寒の内  
 暖爐たく部屋暖に福壽草  
 蕪玉や仰向にねて一人見る  
 解しかぬる碧巖集や雑煮腹

などと詠み、上根岸へ移つて来た碧梧桐氏に「移居十首」を示したりしてゐたが、一月十九日に至り、不安な容體になつて来た。特に痛が烈しいといふわけではないけれども、どことなく苦痛を感じる。知友相踵いで到り、夜は必ず誰か泊つて警戒することにしたところ、二十三日には大分気分がよくなつた。警戒はこの日で解かれたが、この事あつて以来看護輪番を設けることになり、左千夫、碧梧桐、虚子、秀眞、鼠骨、義郎の諸氏が交々その任に當つた。午後から出かけて行つて、深更まで病牀に待するのを例とした。

一月十六日の「日本」紙上に短歌を募る旨が見えてゐる。居士を中心とする少数同人の歌は、

その後も引つゞき「日本」週報に掲げられてゐたけれども、一般から募ることは前年一月の旋頭歌以來中絶の形であつた。今度の募集は社友三人に囑して之に當らしむといふ規定で、在來のと少しく種類を異にする。一人は病中に在て閲讀意の如くならざるを致し、他の一人亦事情に妨げられて期日を充す能はずといふ理由の下に、葯房氏の選歌だけが紙上に掲載されることになつたから、居士もその一人ではあつたのであらうが、この三人選は遂に實現せず、週報には依然居士の目を通した歌が連載されつゝあつた。

一月中居士は「獺祭書屋俳句帖抄上巻」を出版するに就きて思ひつきたる所をいふといふ一篇を口述、虚子、格堂、鼠骨の諸氏をして筆記せしめた。「獺祭書屋俳句帖抄上巻」は居士の俳句を年代別に抄出したもので、二十五年から二十九年までの分が収めてゐる。居士はそれに就て先づ自分の句を選ぶことの非常に難いことから説き起し、各年に於ける俳句の變化などにも言及したもので、一面から云へば明治俳諧史の一部を成すことになつてゐる。居士自身としては自分の幽霊が昔の自分の句を選ぶやうな心持——病牀の慰みの爲に、自分一個の爲に、多くとも十數の俳友に見せる位な心持で選ぶので、「なか／＼古人を凌がうなどといふ大膽不敵な野心は持つてゐない」といふ。さういふ心持で過去の句を一々點檢した結果、「自分の句は自分が輕蔑して居つたよ

りも更に下等なものである」と率直に述べてゐるのである。この文章は早速二月の「ホトトギス」に掲げられた。「獺祭書屋俳句帖抄」上巻が刊行されたのは四月になつてからであつた。

この春居士は比較的多くの歌を作つてゐる。紅梅の下に土筆などを植ゑた盆栽を左十夫氏から贈られては詠み、京の人から香堇を贈られては詠み、碧梧桐氏が赤羽へ土筆を摘みに行くと言つては詠むといふ風に、自在の趣を發揮してゐる。前年山吹の歌を「墨汁一滴」に掲げた時、「粗笨鹵莽、出たらめ、むちやくちや、いかなる評も謹んで受けん。吾は只歌のやすく」と口に乗りに乗るがうれしくて」と附記したが、この春の歌は更に「やすく」の度を加へてゐるやうに思ふ。

くれなるの梅散るなべに故郷につくしつみにし春し思ほゆ  
つくし子はうまなれやくれなるに染めたる梅を絹傘にせる  
鉢植の梅はいやしもしかれども病の床に見らく飽かなく  
春されば梅の花咲く日にうとき我枕べの梅も花咲く  
枕べに友なき時は鉢植の梅に向ひてひとり伏し居り

○  
赤羽根のつゝみに生ふるつくぐしひのびにけらしも摘む人なしに

赤羽根に摘み残したるつくぐし再び往かん老い朽ちぬまに  
つくぐし摘みて歸りぬ煮てや食はんひしほと酔とにひでてや食はん  
つくぐし長き短きそれもかも老いし老いざる何もかもうまき  
つくぐし故郷の野に摘みし事を思ひ出でけり異國にして

### 「病 牀 苦 語」

居士の「麻痺劑服用日記」は六月二十日からはじまつてゐるが、「コレヨリ以前ハ記サズ」とあるから、何時頃から麻痺劑を服用しはじめたものかわからない。その前三月十日から十二日まで記した日記にも已に麻痺劑の事は見えて居り、二月十五日大原恆徳氏宛の手紙にも「私近來病勢進歩毎日魔酔劑を用ゐ居候へ共尙ほ苦痛凌ぎきれず昨今煩悶に煩悶を重ね居候」とあるのを見ると、それ以前からあつたことは慥である。一月の容體不穩の時に用ゐた頓服なるものも、或は麻痺劑であつたのかも知れぬ。



四月及五月の「ホトトギス」に掲げた「病牀苦語」は、毎日二三服の麻痺劑を飲んで、漸う暫時の麻痺的愉快を取つてゐる間に、心に浮ぶところを述べたものである。例の秩序なしだと斷つてあるけれども、秩序の無いことは決してない。病牀に於ける出来事と、居士の心の問題とが緜ひ交ぜになつて、比較的長い章を成してゐる。

「病牀苦語」は先づ肉體の苦痛からはじまる。最初のうちは客の前を憚り、親しい友達の前と知らぬ人の前とでは、多少の差別をしてゐたやうなことも、苦痛が募るに従つてさういふ遠慮をする餘地が無くなつて来る。野心、氣取り、虚飾、空威張、凡そ是等のものは色氣と共に地を拂つてしまつた。昔自ら悟つたと思ふて居たなどは甚だ愚の極であつたといふことがわかつた。今迄悟りと思ふて居たことが悟りでなかつたといふことを知つただけが、寧ろ悟りに近づいた方かも知れん。さう思ふて見ると悟りと氣取りと勘違へして居る人が世の中にも澤山ある。そいつ等を皆病氣に罹らせて、自分のやうに朝晩地獄の責苦にかけてやつたならば、いづれ皆尻尾を出して逃出す連中に相違ない。兎に角自分は餘りの苦みに天地も忘れ、人間も忘れ、野心も色氣も忘れてしまふて、もとの生れたまゝの裸體にかへりかけたのである」と云つてゐる。居士の煩悶は死を恐れるが爲ではない。寧ろ苦痛の甚しい爲に早く死ねばいゝと思ふ方が多くなつてゐるに拘ら

ず、宗教家らしい方面の人からは、精神安慰法——死を恐れしめない方法を教へてくれる。「其好意は謝するに餘りあるけれども、見當が違つた注意であるから何にもならぬ」といふのである。而も裸體にかへりかけた居士は、直にそのあとへ左の如く附加へることを忘れてゐない。

併しかくいへばとて自分は全く死を恐れなくなつたといふわけではない、少し苦痛があるとどうか早く死にたいと思ふけれど、その苦痛が少し減じると最早死にたくも何にもない。大概覺悟はして居るけれど、それでも平和な時間が少し餘計つゞいた時に、不圖死といふことを思ひ出すと、常人と同じやうに厭な心持になる。人間は實に現金なものであるといふことを今更に知ることが出来る。

「病牀苦語」の中には庭に据ゑた大鳥籠の歴史があり、草花を寫生して一々それに歌を讀する記事もある。大鳥籠の最初の周旋者たる淺井黙語氏が、二三箇月のうちに西洋から歸つて來ると聞いて、「或は面會が出来るであらうと楽しんで居る。黙語氏が一昨年出立の前に、秋草の水畫の額を一面鏡別に持て來てこまゝと別れを敘した時には、自分は再度黙語氏に逢ふ事が出来るとは夢にも思はなかつたのである」といふ一節も、垂死の居士の言として人に迫るものがあるが、それとは又違つた意味で看過しがたいのは家族に關する章である。碧梧桐氏一家の人々が赤羽へ土

筆取に行くに當り、「妹も一緒に行くことになつた時には余迄嬉しい心持がした」と云ひ、令妹が歸つて來て愉快さうに土筆取の話をするのを聞いて「余は更に嬉しく感じた」とあるのがその一、母堂が碧梧桐氏一家の人と向嶋の花見に行き、「夕刻には恙なく歸られたので、余は嬉しくて堪らなかつた」とあるのがその二である。「内の者の遊山も二年越しに出來たので、余に取つても病苦の中のせめてもの慰みであつた。彼等の楽しみは即ち余の楽しみである」と居士は云ふ。

家を出でて土筆摘むのも何年目

病牀を三里離れて土筆取

たらちねの花見の留守や時計見る

等の句が惻々として人を動かすのも、この居士のよろこびを直に傳へてゐる爲であらう。

「病牀苦語」は最後に碧、虚兩氏と俳句を談ずることが書いてある。その中に「吾々の俳句の標準は年月を経るに従つて愈々一致する點もあるが、又愈々遠ざかつて行く點もある。寧ろ其一致して行く處は今日迄に略々一致してしまふて、今日以後はだん／＼に遠ざかつて行く方の傾向が多いのであるまいかと思はれる」と云ひ、「芭蕉の弟子に芭蕉のやうな人が無く、其角の弟子に其角のやうな人が出ないばかりでなく、殆ど凡ての俳人は殆ど皆一人々々に違つて居る。それが

必然であるのみならず、其違つて居る處が今日の吾々から見ても面白いと思ふのである」と云ふあたりは、晩年の居士の言として頗る傾聴に値する。我見に執るとか、強ひて羈絆を加へようとかいふ痕迹は毫も見えぬ。各人をして各人の賦性のまゝに、自由に驥足を伸さしめようとするところに、汪洋たる居士の氣魄を感じる事が出来る。

## 最後の厄月

五月五日から居士は「病牀六尺」を「日本」に掲げはじめた。然るにその七日から容體が思はずしからず、十三日に至つて未曾有の大苦痛を現じた。厄月の五月はこゝに至つても猶居士を脅すことを已めなかつたのである。十四日は比較的無事であつたが、前日の反動で非常に弱り、十五日の朝は三十四度七分といふ體温が少しも上らなかつた。もう居士もあきらめて、前年秋秀眞氏の造つた石膏像を取上げ、その裏に「自題 土一塊牡丹生けたる其下に 規 明治三十五年五月十五日」と書きつけたほどであつたが、午後からは次第に苦痛が薄らぎ、恰も根岸三嶋神社の祭

禮であつたので、豆腐汁、木の芽和の御馳走に一杯の葡萄酒を傾ける。祭の句が八句も出来るといふ風で、どうやら危険を脱し得た。

「病牀六尺」を読んで著しく目につくのは、繪畫に關する文字の多いことである。當時居士の目に觸れた繪畫は主として木版刷の畫本であつたが、居士はこれによつて病牀徒然の時を銷すと共に、何等か語るべきものをその裏に見出し得たのであつた。居士の畫本を見るのは必ずしも畫の鑑賞のみにとどまらぬ。座右の畫本から鶴を畫いたものを探し出して、その趣向を比較して見たり、廣重の「東海道續繪」には何處にも鳥が畫いてないが、五十三驛の一枚畫を見ると、原驛のところは鶴が二羽田に下りて居り、袋井驛のところでは道ばたの制札の上に雀が一羽とまつてゐた、といふことを發見したりする。文鳳、南岳の「手鏡畫譜」のうち、文鳳の畫十八番に就て一こまかな説明をしてゐるところもあるが、あれなどは居士が如何に畫本を楽しんで見てゐたかを語るもので、殆ど畫を読むの域に達してゐるかと思ふ。

「如何にして日を暮すべきか」これが居士の大問題であつた。從來楽しみとしてゐたことも、却つて皆苦しみの種になつた。畢竟周圍と調和することが甚だ困難になつたので、「麻痺劑の十分に效を奏した時は此調和が稍々容易であるが、今は其麻痺劑が十分に效を奏することが出来なくな

つた」といふのである。「情ある人我病牀に來つて余に珍しき話など聞かさんとならば、誰んで余は爲に多少の苦を救はるゝことを謝するであらう。余に珍しき話とは必ずしも俳句談にあらず、文學談にあらず、宗教、美術、理化、農藝、百般の話は知識なき余に取つて悉く興味を感じぬものはない」と居士は云つてゐる。「病牀六尺」の材料は訪客の話頭から生れたものも少くないが、それにしては範圍が實に廣汎である。忽にして釣の話、忽にして能の話、忽にして水難救濟會の話、信玄と謙信との比較が出るかと思へば、演劇界の改良は寧ろ壯士俳優の任務であるといふやうな議論も出る。或は庭園を論じ、或は盆栽を論じ、芝居と能との比較を論じ、或は女子教育の必要を論じ、或は飯炊會社を興さんことを希望するなど、殆ど應接に邊が無い。あらゆる樂は變じて苦となる居士の境涯に於て、かういふ活力が那邊に藏されてゐるか、不思議といふより外に適當な言葉は見當らぬやうである。

居士の枕頭には嘗て「古白曰來」の下に畫かれた千枚通しがある。「俳句分類」に従事してゐた時分は、毎日五枚や十枚の半紙に穴をあけて綴込まぬことが無かつた爲、錐の外面は常に光を放ち、極めて滑であつた。或日ふと取上げて見ると、錐は全く錆びてしまつて、二三枚の紙を通すにも錆に妨げられて快く通らぬ。居士はこゝに於て「錐に錆を生ず」の歎を發し、英雄髀肉の歎

に比せざるを得なかつた。——「病牀六尺」の中にはかういふ箇所もある。

○余は今迄禪宗の所謂悟りといふ事を誤解して居た。悟りといふ事は如何なる場合にも平氣で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平氣で生きて居る事であつた。

○因みに問ふ。狗子に佛性有りや。曰、苦。

又問ふ。祖師西來の意は奈何。曰、苦。

又問ふ。……………曰、苦。

「病牀六尺」の中にはかういふ箇所もある。

居士の病牀に於ける煩悶は、生死出離の大問題ではない。病氣が身體を衰弱せしめた爲か、脊髄系を侵されてゐる爲か、とにかく生理的に精神の煩悶を來すのだと云ひ、生死の問題は大問題ではあるが、それは極單純な事であるので、一旦あきらめてしまへば直に解決される、といふことを「病牀六尺」に書いたことがある。この「あきらめる」といふことに就て或人から質問が來た。生死の問題はあきらめてしまへば解決されるといふこと、嘗て兆民居士を評して「あきらめる事を知つて居るが、あきらめるより以上のことを知らぬ」と云つたこと、撞著して居りはせ

ぬかといふのである。居士はこれに對し譬喩を以て答へた。

子供が養生の爲に親から灸を据ゑられる場合、灸はいやだと云つて泣いたり逃げたりするのは、あきらめがつかぬのである。到底逃げるにも逃げられぬ場合だと觀念して、親の云ふ通りおとなしく灸を据ゑて貰ふ。これは已にあきらめたのである。併しその間灸のあつさに堪へず、精神上に苦悶を感じるとすれば、それは僅にあきらめたのみで、あきらめる以上の事は出來ない。親の云ふ通りおとなしく灸を据ゑるのみならず、その間書物を見るとか、いたづら書でもしてゐるとか、さういふ事で灸の事を少しも苦にしなくなれば、はじめてあきらめる以上の域に達するのである。

兆民居士が一年有半を著した所などは、生死の問題に就いてはあきらめがついて居つたやうに見えるが、あきらめがついた上で夫の天命を楽しんでといふやうな楽しむといふ域には至らなかつたかと思ふ。居士が病氣になつて後頻りに義太夫を聞いて、義太夫語りの評をして居る處などは稍々わかりかけたやうであるが、まだ十分にわからぬ處がある。居士をして二三年も病氣の境涯にあらしめたならば、今少しは楽しみの境涯にはひる事が出來たかも知らぬ。病氣の境涯に處しては、病氣を楽しむといふ事にならなければ生きて居ても何の面白味

もない。

この一段は「仰臥漫録」に「理が分ればあきらめつき可申、美が分れば楽しみ出来可申候」と書いたところを、更にわかり易く敷衍したもので、前年の「命のあまり」に説かるべくして説かれなかつたところを、こゝで補足したやうに思はれる。この「あきらめ」と「楽しみ」に關する見解の如きは、居士のやうな病者にしてはじめて發せらるゝものでなければならぬ。

## 「病牀六尺」百回

「病牀六尺」は六月以降は一日も休まずに掲載された。五月中には何度か關つた日がある。古嶋一雄氏に宛てた左の手紙は月日を明にせぬが、多分その時分のものであらうと思ふ。

拜啓僕ノ今日ノ生命ハ病牀六尺ニアルノデス、毎朝寐起ニハ死ヌル程苦シイノデス、其中デ新聞ヲアケテ病牀六尺ヲ見ルト僅ニ蘇ルノデス、今朝新聞ヲ見タ時ノ苦シサ、病牀六尺ガ無イノデ泣キ出シマシタ、ド！モタマリマセン

若シ出来ルナラ少シデモ（半分デモ）載セテ戴イタラ命ガ助カリマス

僕ハコンナ我儘ライハネバナラヌ程弱ツテキルノデス

## 「病牀六尺」百回

居士はこの意味に於て怠らず原稿を送り、「日本」の方も關かさず載せたので、八月二十日には遂に百回に達した。居士は「病牀六尺が百に満ちた」といふよろこびの下に、かういふことを書いてゐる。はじめこの原稿を書きはじめた時分に、毎日狀袋の上書を書くのが面倒なので、新聞社に頼んで狀袋に活字で刷つて貰つた。それでさへ病人としてはあまり先の長い事をやると云つて笑はれはすまいかと心配したのに、社の方では百枚註文した狀袋を三百枚刷つてくれた。この數には驚いて、十箇月先のことはどうなるか、おぼつかないものだど心配したが、思つたよりは容體がよく、遂に百枚の狀袋を費したのは居士としても寧ろ意外であつた。此百日といふ長い月日を経過した嬉しさは人にはわからんことであらう。併しあとにはまだ二百枚の狀袋がある。二百枚は二百日である。二百日は半年以上である。半年以上もすれば梅の花が咲いて来る。果して病人の眼中に梅の花が咲くであらうか」といふのである。

「病牀六尺」が百に達するよほど前から、居士は菓物の寫生をはじめた。六月二十七日に青梅を畫いたのを手はじめに、丹念な色彩の寫生を續けて行つた。くだものだけでなしに、南瓜とか、

茄子とか、胡瓜とかいふものを畫いた日もあるが、とにかく八月六日までの間に十八の寫生を完了した。而して菓物帖を畫き上げるより早く、八月一日には別の畫帖に移つて草花の寫生をはじめてゐる。この寫生畫は一枚の葉を畫くに當つても、何度となく繪具を塗抹し、實物の感じを出さうと力めたもので、健康者が畫くにしても恐るべき努力を要するものである。

居士は「病牀六尺」に次のやうに書いた。

草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に寫生して居ると、造化の祕密が段々分つて來るやうな氣がする。

又かうも書いてゐる。

或繪具と或繪具とを合せて草花を畫く、それでもまだ思ふやうな色が出ないと又他の繪具をなすつてみる。同じ赤い色でも少しづつ色の違ひで趣が違つて來る。いろ／＼に工夫して少しくすんだ赤とか、少し黄味を帯びた赤とかいふものを出すのが寫生の一つの楽しみである。神様が草花を染める時も矢張こんな工夫して楽しんで居るのであらうか。

居士はモルヒネを飲んでから寫生をやるのを何よりの樂とし、うまく畫けても畫けないでも、だん／＼に寫生帖の畫き塞がれて行くのがうれしくて堪らなかつたのである。

草花帖の最後に羯南翁のところから朝顔の鉢を借りて來て、午後から寫生をやつてゐるところへ、伊東牛歩、鈴木芒生兩氏が訪ねて來た。この時芒生氏の齎した南岳の艸花畫卷は大に居士の心を動かし、遂にこの畫卷を割愛して貰ふわけに行くまいか、と切出すに至つた。これは居士が今生に於ける最後の願望であり、又これまで物を所有するといふことに就て、この時ほど熱烈な願望を懷いたことは無かつたらうと思ふ。所藏者たる皆川丁堂氏は已むを得ざる事情があるからとの理由で、割愛することは肯じなかつたけれども、居士は更に切望の旨を牛歩、芒生兩氏宛に手紙で申送り、結局居士の生前だけ提供するといふことで落著した。この畫卷に對する執著が如何に異常であつたかは、牛歩、芒生兩氏に宛てた二通の手紙からも十分に察することが出来る。「病牀六尺」には二回交互つてこの顛末を記し、艸花畫卷を「渡邊のお嬢さん」といふことにして戀物語のやうな書き方を試みた。

居士は南岳の草花畫卷を得て、「草花帖我に露ちる思ひあり」と詠んだ。「草花帖」の五字は後に「病牀の」と改められてゐる。「草花を畫く日課や秋に入る」といふ句の通り、草花の寫生に日を費して來た居士が、その完成する日に當つて南岳の草花畫卷を見、熱烈な願望を起したのは、何だか偶然でないやうな氣がする。居士は「是れが人物畫であつたならば、如何によく出來て居

つても、余は所望もしなかつたらう、また朝夕あけて見る事も無いであらう。それが余の命の次に置いて居る艸花の畫であつたために、一見して惚れてしまふたのである」と云つてゐる。死期を前にしてこの願望を起した居士は、これを手に入れることによつて最後の大満足を経験したのである。

丁堂氏に對しては直に「我に露ちる思ひあり」以下七句を短冊にした、めて贈り、八月二十九日に至つて更に十枚の短冊を贈つた。その短冊の中に弘法、傳教、親鸞、日蓮、法然諸宗祖の讚の句があるのは、丁堂氏が一寺の住職である因により、新に詠んだものであらうと思はれる。この短冊に添へた一葉の端書が、居士が今生に於て筆を執つた最後の書信であつた。

### 絲瓜の水も間に合はず

愈々最後の九月になつた。「仰臥漫録」の「麻痺劑服用日記」は七月二十九日で絶えてしまつたが、卷末に記された歌や俳句はその後も絶えなかつたらしい。短歌では

九月三日腕もりの歌戲寄鄰翁

麩の海に汐みちくれば茗荷子の葉末をこゆる眞玉白魚

といふのが最後のものであらう。鄰翁は云ふまでもなく羯南翁である。

「仰臥漫録」には記されていないけれども、九月五日の「病牀六尺」に左の長歌が出た。

くれなるの、旗うごかして、夕風の、吹き入るなべに、白きもの、ゆるらゆるらぐ、立つは誰、ゆるらぐは何ぞ、かぐはしみ、人か花かも、

花の夕顔

「くれなるの旗」といふのは、佐藤肋骨氏が天津から送つて來た樺色の旗で、それが二旒床の間の鴨居にかけ垂してあつた。この夕顔は前年「仰臥漫録」によく出て來た扁蒲ではなしに、夜會草と稱する鉢植の花の方である。彼の旗の下にこの鉢を置くと、又變つた花の趣になる。「此帛に此花ぬひたらばと思はる」と云つて詠んだのがこの長歌なので、これが最後の歌であつた。

この年居士は「煮鬼憶諸友歌」をはじめ、比較的多くの長歌を作つてゐる。八月には「おくられものくさくさ」六首があり、早の歌二首がある。早の歌が

天なるや早雲湧き、あらがねの土裂け木枯る、青人草鼓打ちく、空

ながめ虹もが立つと、待つ久に雨こそ降らめ、しかれども待てるひじりは、世に出でぬかも

と云ひ、

早して木はしをるれ、待つ久に雨こそ降れ、我が思ふおほき聖、世に出でてわをし救はず、雨は降れども

と云ひ、二首とも聖といふことに言及してゐるのは注目し値する。

八月中の居士の手紙には、苦言忠告の書がぼつ／＼見えるが、九月に入つてからの「病牀六尺」にも亦それがある。近頃は少しも滋養分の取れぬので、體の弱つた爲か、見るもの聞くもの悉く癪にさはるので、政治といはず實業といはず新聞雑誌に見る程の事皆我をじらすの種である」とあるやうに、癪に障つた結果が「病牀六尺」に現れたのだとも解釋出来るし、何か目に見えぬ力が居士をしてこの種の文を成さしめたのだとも考へられる。

九月九日には左千夫、四方太、節の諸氏が枕頭に在つた。居士の足には已に水腫が来て居り、病の重大なることを思はしめたが、煩悶叫喚の間にはいろ／＼雑談の出る餘裕があつた。「病牀六尺」百二十二回（九月十一日）には足の腫れたことからはじまつて、當日の談片が材料になつて

ゐる。

十日の蕪村句集論講は居士の加はつた最後の論講である。前日より元氣は無かつたけれども、猶論講が済んでから、嘗て「病牀六尺」で評した鳴雪翁の句に就て、翁が「ホトトギス」で應酬したのに對し、切れ／＼ながら再駁するだけの氣力を失はなかつた。

十二日以後「病牀六尺」の記事が目立つて短くなる。その文句も未曾有の苦痛を帯ぶるに至つた。

#### 百二十三

○支那や朝鮮では今でも拷問をするさうだが、自分はきのふ以來晝夜の別なく、五體すきなしといふ拷問を受けた。誠に話にならぬ苦しさである。（十二日）

#### 百二十四

○人間の苦痛は餘程極度へまで想像せられるが、しかしそんなに極度に迄想像した様な苦痛が自分の此身の上に来るとは一寸想像せられぬ事である。（十三日）

#### 百二十五

○足あり、仁王の足の如し。足あり、他人の足の如し。足あり、大磐石の如し。僅かに指頭



を以てこの脚頭に觸るれば天地震動、草木號叫、女媧氏未だこの足を斷じ去つて、五色の石を作らず。(十四日)

十四日の朝、前夜一泊した虚子氏に口授して文章を筆記せしめた。「九月十四日の朝」がそれである。居士は「病氣になつて以來今朝程安らかな頭を持って此庭を眺めた事は無い」と云ひ、「何か苦痛極つて暫く病氣を感じないやうなもの不思議に思はれた」と云つてゐる。一種云ふべからざる沈黙の氣が文章全體に漲つてゐて、「たまに露でも落ちたかと思ふやうに、絲瓜の葉が一枚二枚だけひらく」と動く」といふやうな小さな描寫も、そのまゝには看過しがたいやうな氣がする。納豆賣が來たのを聞いて、自分が食ひたいわけではないが少し買はせる。「余の家の南側は小路にはなつて居るが、もと加賀の別邸内であるので、此小路も行きどまりであるところから、豆腐賣りでさへ此裏路へ來る事は極めて少いのである。それで偶々珍しい飲食商人が這入つて來ると、余は奨勵の爲にそれを買ふてやりたくなる」といふのである。居士の心持はこの期に至つても決して曇つてゐなかつた。

居士が世の中に遺した文章としては、先づこの一篇を最後のものと見るべきであらう。「病牀六尺」は十五日には出たが、十六日は休み、十七日の百二十七回分は西芳菲山人の來書を以て之に

代へた。山人も「病牀六尺」の二三寸に過ぎず、頗る不穩なのを見て見舞を述べ、「俳病の夢みるならんほとゝぎす拷問などに誰がかけたか」といふ狂歌を寄せ來つたのである。これが終に「病牀六尺」の最後になつた。

何か寫生するつもりで畫板に紙の貼つてあつたのを、無言で傍に持ち來らしめ、

絲瓜 咲て 痰の つまりし 佛かな

をと、ひの 絲瓜の 水も 取らざりき

痰一斗 絲瓜の 水も 間にあはず

の三句をしたゝめたのは、十八日の午前である。これが居士の絶筆であつた。

この日はあまりものも云はず、昏睡状態が続いてゐたが、その夜母堂も令妹も、一人残つて泊つてゐた虚子氏も、誰も氣づかぬうちに、居士の英魂は已に天外に去つてゐた。あまり蚊帳の中の靜なのを怪しんで居士の名を呼んだ時は、手は已に冷え渡つて、僅に額上に微温を存するのみであつた。時に九月十九日午前一時、虚子氏が急を報ずる爲に外へ出たら、十七夜の月が明るく照つてゐたさうである。

「ホトトギス」第六卷第十一號は八月に出る筈が出ず、九月二十日に至つて漸く發行された。

居士の文章は「天王寺畔の蝸牛廬」及「九月十四日の朝」の二篇がこの號に載つてゐる。「天王寺畔の蝸牛廬」は「月の都」執筆當時の回想を述べたもので、以前に筆記してあつたのが偶然この號に掲げられたのである。「子規子逝く。九月十九日午前一時遠逝せり」といふ簡単な廣告を「九月十四日の朝」の餘白に幸うじて組入れることが出来た。

居士の遺骸は二十一日午前九時、瀧野川村宇田端大龍寺に葬られた。會葬者は百五十餘名に及んだ。戒名は「子規居士」と定め、明治三十八年に至つて羯南翁の筆に成る墓石が建てられた。

以上が子規居士三十六年の生涯の大體である。著者はこゝに至つて更に結語や論讚めいたものを附加へようとは思はぬ。それは最初に豫定した頁を超過した爲ばかりではない。居士の一生を要約して全體を結ぶやうな、適當な言葉を發見し得ない爲である。

孫悟空のやうに一度伸した如意棒を、又縮めて耳の中に收める手際を有せぬ限り、この邊で筆を擱くより仕方があるまいと思ふ。

子規居士

昭和十七年三月一日印刷

子規居士

昭和十七年三月五日發行

◎定價一圓七十錢

著者

柴田宵曲

發行者

東京市神田區神保町一ノ一  
株式會社三省堂

印刷者

代表者 龜井豐治  
東京市神田區三崎町二ノ一六  
東京印刷製本株式會社  
代表者 荻野貴右

發行所 株式會社三省堂

本店 東京市神田區神保町一丁目一番地  
振替東京三三五五  
日本出版文化協會會員一五〇一號  
支店 大阪市西區阿波野下通二丁目六番地

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地  
日本出版配給株式會社不許複製

富安風生著 句集 松	長谷川素逝著 句集 砲	山口誓子著 句集 炎	村上鬼城著 定本 鬼城句集	高濱虚子選 支那事變句集	ホトトギス社編 ホトトギス同人句集
籟	車	晝	集	集	集
一四六判 一八〇頁	一四六判 一六〇頁	二四六判 二五〇頁	二四六判 二八四頁	一四六判 一八四頁	四六判 五二八頁
一・七〇 〇・九	一・五〇 〇・〇	一・五〇 〇・〇	二・〇〇 〇・〇	一・二〇 〇・九	三・五〇 二・四
三 省 堂 刊					

H-71

高濱虚子編 改訂新歲時記	高濱虚子編 季寄せ
三五判・クロス装九六〇頁・函入 特價三・三〇 送料・二〇	四六半裁判三三八頁・函入 定價一・八〇 送料・〇六
巨匠虚子が、舊套を捨て専ら作句者本位に編まれた文學的香り高き名篇。解説の句例たる古今の名吟一萬は虚子選名句集でもある。改訂に當り新季題五十、例句千五百を追補、總インデア紙とした。	句作に當つて題を探るのに最も簡單に、手つとり早くその用を果し、又吟行の時などに、觸目の景色の中に季題を見出す場合常に句作の好伴侶となるもの。歳時記とともに全俳人の活用を俟つ。
三 省 堂 刊	

H-72

山口誓子著

### 俳句鑑賞の爲に

四六判・二〇〇頁  
定價一・〇〇 送料・〇六

自句自解と他句自解とより成り、俳句鑑賞の仕方、俳句の纏め方、作り方等を會得せしめる良書。説明は簡潔にして要を衝く名文章。

山口誓子著

### 秀句の鑑賞

四六判・二三八頁  
定價一・二〇 送料・〇九

新選秀吟百句、古句鑑賞、ラジオ俳壇、ラジオ俳壇、戦争俳句の鑑賞、冬の美しさの五篇に亘つて独自の立場より古今の秀句を精選、之を鑑賞す。

大野林火著

### 現代の秀句

鑑賞と作家

B6判・三四四頁  
定價一・七〇 送料・二〇

秋櫻子、誓子、風生、草田男、楸邨、梵、波郷、汀女、未井、普羅、水巴、蛇笏、亞浪等現代の代表俳人とその作品を鑑賞批判す。

三 省 堂 刊

910  
309

終

Ⓣ ¥170

規格 B. 6

